

# ソウル・夢村土城出土土器編年試案

——いわゆる百濟前期都城論に関連して——

白井克也

## 1. 序

朝鮮半島中部地域（漢江流域）は、百濟建国の地であり、三国（高句麗・百濟・新羅）争奪の地でもあるという歴史的意義をもっているため、様々な方面から研究が試みられてきた。本稿の主題となる百濟都城の研究には、①「百濟前期」都城に関する文献を史料批判する研究と、②実際の城址遺跡を考古学的に検討する研究とがあるが、本来原理と手続きを異にする筈の2つの研究方法のうち、①の歴史学的方法が従来から盛んであったのに、②の考古学的方法による検討（原三国時代・三国時代土器の編年や古墳・城址の時間的關係）は最近本格化したばかりで、未だ十分ではない。

本稿は、「百濟前期」都城の候補地であるソウル・夢村土城を考古学的方法により検討する。

第2章では、夢村土城出土土器に関するソウル大編年の問題点を指摘して、遺構出土一括遺物への再照明の要を説く。

第3章では、夢村土城をはじめとする蚕室地区百濟土器の分類と編年を行う。

第4章では、夢村土城の考古学的位置を考察する。

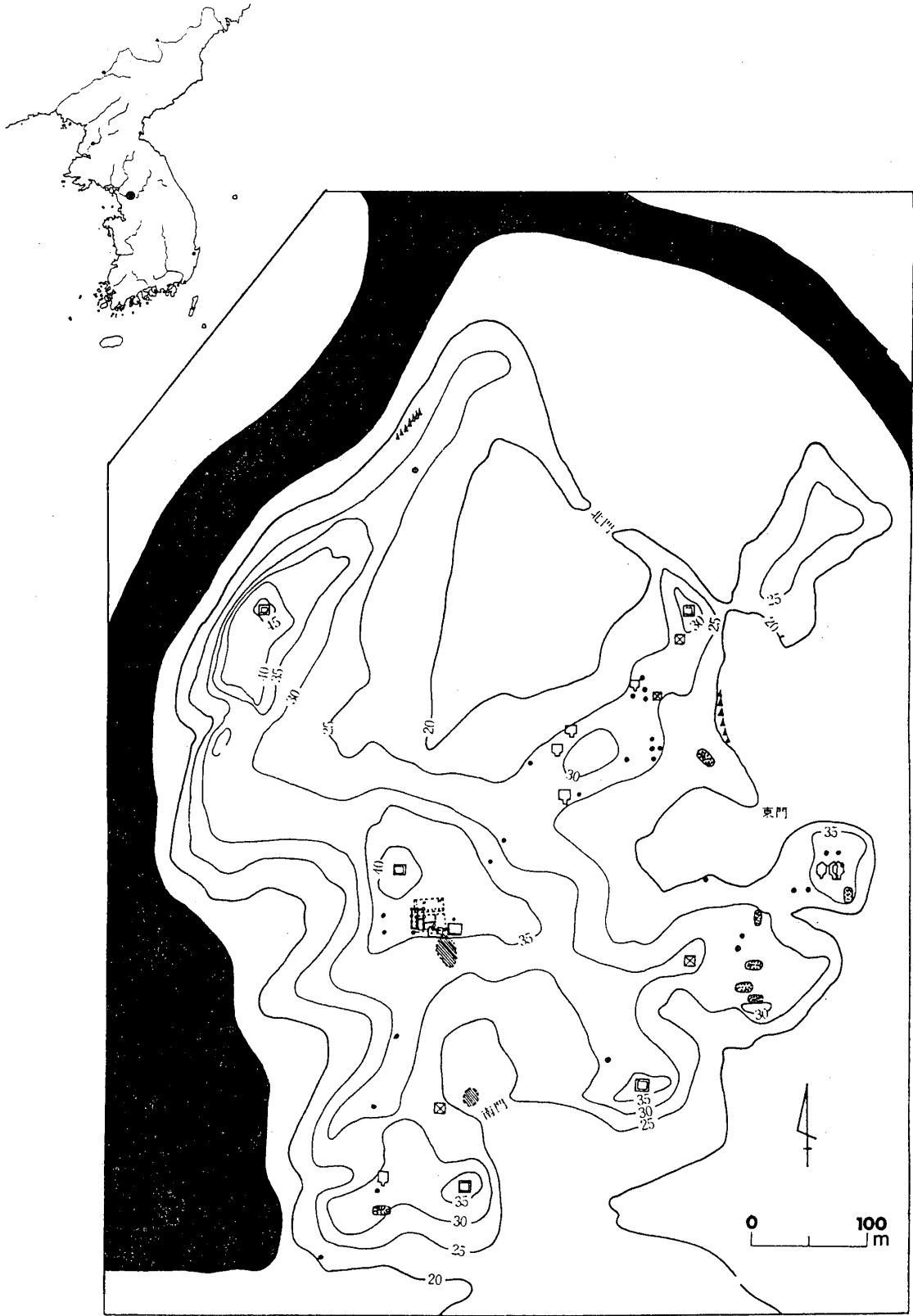
## 2. 夢村土城の研究史——一括遺物への再照明の必要——

### (1) 位置（挿図1）

「百濟前期」遺跡はソウル東南郊、漢江東南岸の沖積地と丘陵一帯（蚕室地区）に集中している。平地に石村洞古墳群と可楽洞1・2号墳、背後の丘陵上に可楽洞3～6号墳と芳蕘洞古墳群、北東に夢村土城、その北方の漢江沿いに風納洞土城がある。この付近の城址には、この他、漢江南岸の平地に三成洞土城があり、山城には阿旦山城（北岸）・二聖山城・南漢山城（南岸）等があるが、ある程度考古学的調査が行なわれたのは風納洞土城・夢村土城・二聖山城のみである。

### (2) 調査の経過

夢村土城は自然丘陵を版築城壁で繋いだ南北最大730m、東西最大540m、最大比高25mの楕円状をなし、丘陵が切れるところは北門址、南門址等と呼ばれている。



挿図1 夢村土城の位置と地形

『三国史記』にいう「百濟前期」都城である「河南慰禮城」・「漢城」の異同・変遷・比定について諸説を列挙することは省くが、夢村土城も候補に挙げられている〔崔夢龍・權五榮1985：表1〕。しかし、1983年以前の夢村土城には、成周鐸の踏査〔1983〕等を除くと、ほとんど考古学的調査の手が及ばず、文献上の百濟都城との対応が考古学的に証明されたことはなかった。（以下、各年度の調査・報告書・遺構名を、調査年度を冠して「84年報告」・「88-1号住居址」等とする）。

1983年の城壁調査〔84年報告：231-260, 269-284頁〕に始まり、1984年、夢村土城発掘調査団としてソウル大学校・崇田大学校・漢陽大学校・檀国大学校の各博物館が合同調査し〔84年報告〕、1985年には同調査団としてソウル大学校博物館が土城内全域にグリッドを設定し、試掘坑をめぐらした〔85年報告〕。同博物館は1987年に東北地区〔87年報告〕、1988年に東南地区〔88年報告〕、1989年に西南地区〔89年報告〕をさらに詳細に調査した。これまでに版築城壁、土壇墓、甕棺墓、竪穴住居址、地上建物址、貯蔵坑、積石遺構、蓮池遺構等と多量の遺物が確認されている。

### （3）土器の分類・編年・実年代論に関する問題点

調査で得られた資料に基づき、85年報告は夢村土城の上限年代に触れ、88年報告は土器の分類と編年を扱い、89年報告で補っている（ソウル大編年と総称）が、疑問も残る。それは遺構での一括性に基つかないためである。

**土器の分類と編年** 88年報告では、「遺物複合体 (aggregation), 類型 (assemblage), 類 (type group), 型 (type)」という4階層の「分類体系」〔88年報告：72—73頁〕により、土器の階層分類を行なっている。

まず、88年調査での全出土土器（「遺物複合体」）を「胎土・表面の色・焼成度等」によって灰青色硬質・灰色軟質・赤褐色軟質・黒黄色泥質の4種「土器質」に分け、前3者を石村洞古墳群での共伴例を根拠に1「類型」とみて「夢村類型」（＝百濟土器）、後者を「黒色・黒灰色・黄褐色の表面色を帯び、胎土の質が泥質で、焼成度が高くない軟質であり、表面をこすって処理した土器」で、漢江北岸の九宜洞遺跡出土土器に似ていることから「九宜洞類型」（＝高句麗土器）とした〔88年報告：74—75頁〕。この2「類型」区分自体は受け入れてよからう（以下、89年報告に従い「百濟土器」・「高句麗土器」と呼び替えるが、筆者は分類名称に政治権力の所在を含意させず、簡便で通用の名称を用いたままであり、ややニュアンスを異にする）。

そして百濟土器各器種（「類」）を計量属性で数群に分け、これと他の属性（直口短頸球形壺の肩部紋様、平底鉢・壺の口縁部形態等）との関係を調べ、さらに灰青色硬質・灰色軟質にまたがる器種については土器質が時期差を反映するという前提のもと、各群と土器質との相関を統計学的に証明して新古を決定し、＜百濟土器各器種の古い群（「夢村Ⅰ期」）→百濟土器各器種の新しい群（「夢村Ⅱ期」）→高句麗土器＞と変遷したとして、それぞれ1時期と認めている（表1）。

89年調査では無紋土器と、朴淳發〔1989〕編年「原三国時代前期末」の「原三国時代土器」が初めて確認され、報告者は「原三国時代土器」から百濟土器にいたる土器編年を試みている〔89年報

告：188—192頁〕。無紋土器・「原三国時代土器」は夢村土城築造以前のものとされているが、根拠は不明である。百濟土器（「夢村Ⅰ期」・「夢村Ⅱ期」）、高句麗土器に対する評価はあまり変わっておらず、新羅土器はやはりみられない。報告者はこれらの土器等を前年の編年と合わせ、〈無紋土器→「原三国時代土器」→百濟土器（「夢村Ⅰ期」→「夢村Ⅱ期」）→高句麗土器→（新羅土器）→高麗青磁→朝鮮白磁〉と、それぞれ単純期をなす変遷を想定しているようである。

しかし、各器種内の分類も器種間の並行如何も、詰まるところ、〈百濟土器軟質土器→百濟土器硬質土器→高句麗土器〉という前提にあてはめているに過ぎないように感じられる。何より、全出土土器を階層的な枠組みで一律に分類しようとするあまり、遺構での一括資料の在り方と矛盾しており（後述）、むしろ一括性を否定することにより成り立った論ということができる。

**実年代（表1）** 85年報告は同年出土「西晋銭文陶器」によって夢村土城の上限を3世紀末～4世紀初とし〔85年報告：162—163頁〕、88年報告でこれを「夢村Ⅰ期」の上限年代に当てている〔88年報告：199—200頁〕。しかし、銭紋陶の年代と「夢村Ⅰ類」上限と関連づける根拠はなく、「初期百濟の重要な土城のひとつ」としての夢村土城の築造・使用との関連も証明されていない。銭紋陶片から夢村土城の上限年代を西晋並行期に求めうる可能性は否定できない〔亀田1987：48—51頁〕が、遺構や土器と結びつかないことは留意すべきであろう（後述）。

「夢村Ⅱ期」の下限・高句麗土器の登場は高句麗による百濟・漢城陥落（475年）によって5世紀中葉以後とする〔88年報告：199—200頁〕が、これは高句麗土器単純期の存在という未検証の前提のもとに成り立っている（後述）。

#### （4） 夢村土城研究の課題

以上にみた夢村土城報告書の考察の問題点は、遺構での一括遺物に必ずしも基づいていないことにある。そこでは、科学的・客観的な論証を志してはいるものの、考古資料から百濟史像を構築するよりも、古文献から得られた既定の歴史像によって考古資料を解釈している部分がなくはないようだ。夢村土城内の生活遺構から豊富な資料が得られた今、考古学的方法による独自の検討を推し進めていくべきであろう。そこで、本稿では、夢村土城の考古学的な研究として、遺構からの良好な一括資料を見出し、これを基礎に出土土器の編年を試みることにする。

表1 夢村土城報告書の編年

類型\区分	土器の分期	歴史的 性格	年代
夢村類型	夢村Ⅰ期	初期百濟の重要都城の一つである時期	3c.末・4c.初～4c.中葉
	夢村Ⅱ期	初期百濟時期の核心的位置を占める土城時期	4c.中葉～5c.中葉以前
九宜洞類型	初期百濟土城としての機能喪失時期		5c.中葉以後

### 3. 蚕室地区百濟土器の分類と編年

#### (1) 視 点 <百濟土器単純期→百濟土器・高句麗土器並存期>

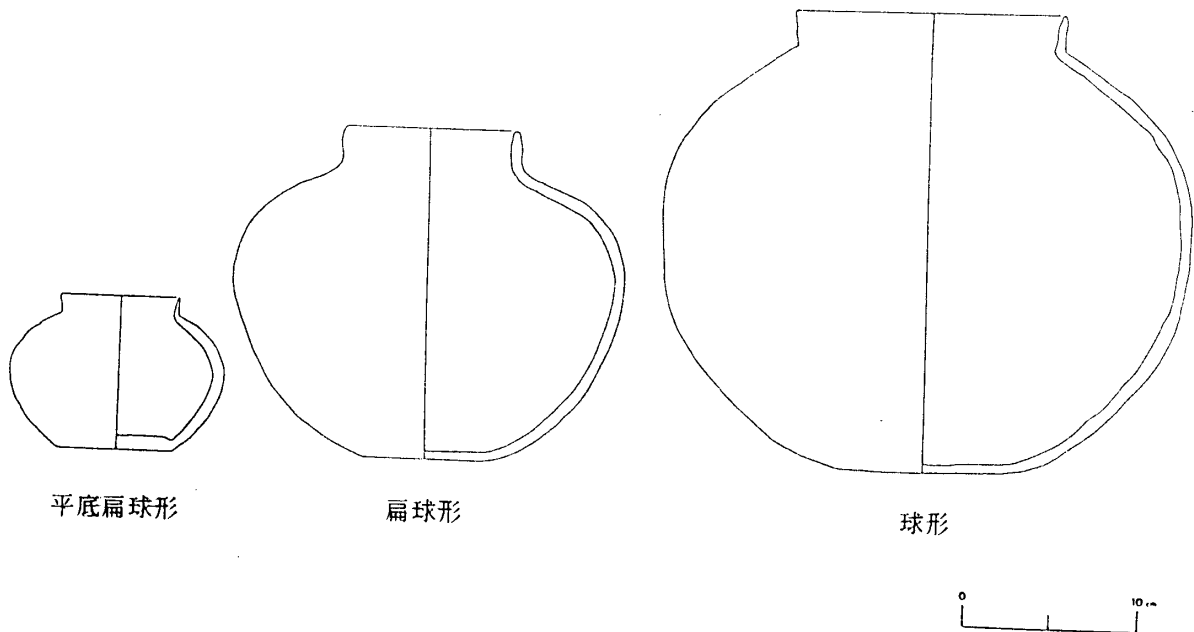
夢村土城での遺構ごとの共伴遺物に着目すると、各遺構での土器の在り方や遺構の切り合い関係から、編年に結びつきそうな事実をいくつか指摘できる。いずれも、<百濟土器軟質土器→百濟土器硬質土器→高句麗土器>というソウル大編年の前提が成立しがたいことを示している。

まず、百濟土器について、軟質土器が古く硬質土器が新しいということは、全体的な傾向としてはいえるかも知れないが、共伴例も少なくなく、安易に前後関係としては捉えきれないことが挙げられる。器種ごとに土器質を選択した可能性もある（後述）。

高句麗土器は遺構で単純には存在せず、同一遺構では、ほとんど常に百濟土器の方が多い。しかも、百濟土器三足土器がない遺構では高句麗土器もなく、三足土器がある遺構では高句麗土器もあるという傾向がみられる等、高句麗土器の有無は百濟土器の時期差と関連するようだ。即ち、百濟土器単純期と百濟土器・高句麗土器並存期は想定できるが、高句麗土器単純期は想定しがたい。百濟土器は近隣の古墳にも副葬されて在地色が強く、高句麗土器は外来系と思われるので、<百濟土器単純期→百濟土器・高句麗土器並存期>という関係が想定される（「百濟土器」・「高句麗土器」は2種の異系統の土器に対する分類名称であり、政治権力の所在と一致する必要はない）。

#### (2) 百濟土器主要器種の分類——①直口短頸壺・②平底鉢・③三足盤・④三足杯・⑤高杯——

##### ① 直口短頸壺



挿図2 直口短頸壺の器形の分類

表2 直口短頸壺肩部紋様帯の分類


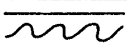
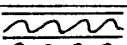
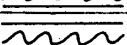
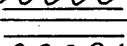
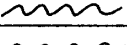
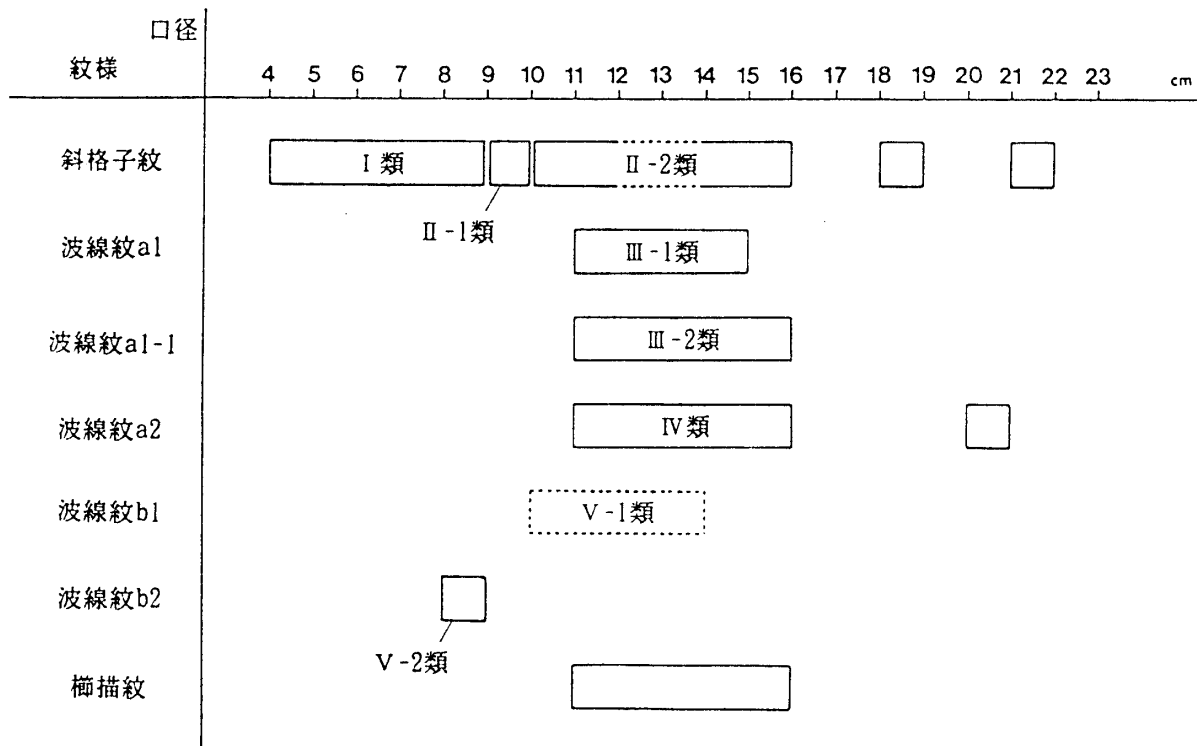
		工 具	紋様帯	内 容	
斜格子紋		単歯具のみ	区画	斜行沈線	
波線紋a1				波線 1条	
波線紋a1-1				波線 1+1条	
波線紋a2					
波線紋b1				半開放	波線 2条
波線紋b2				開放	
櫛描紋	各種	多歯具使用	各種	櫛描集線	

表3 肩部紋様帯と口径の対応



夢村土城と百濟古墳から出土する。既に定森秀夫の4分案がある〔1989：452—456頁〕が、その後出土例が増えているので、器形（法量を考慮）と肩部紋様帯により新たな分類を試みる。

**器形** 平底で横長の胴部をもつ平底扁球形、丸底か「抹角平底」でやや横長の胴部をもつ扁球形、全体が球形に近い丸底球形の3種がある（挿図2）。平底扁球形の個体は器面を磨いているが、他は叩き目を残しており、器形に製作技法が関係していると思われる。また、平底扁球形の個体は

口径4～9cm, 丸底扁球形の個体は口径9～10cm, 丸底球形の個体は口径9cm以上であり, 器形と法量が相関していることが分かる。丸底扁球形の個体と丸底球形の個体は口径差は微妙で, やや出入りもあるが, 器高を考慮すると容積では差が大きくなり, 器形と法量の相関は明かである。

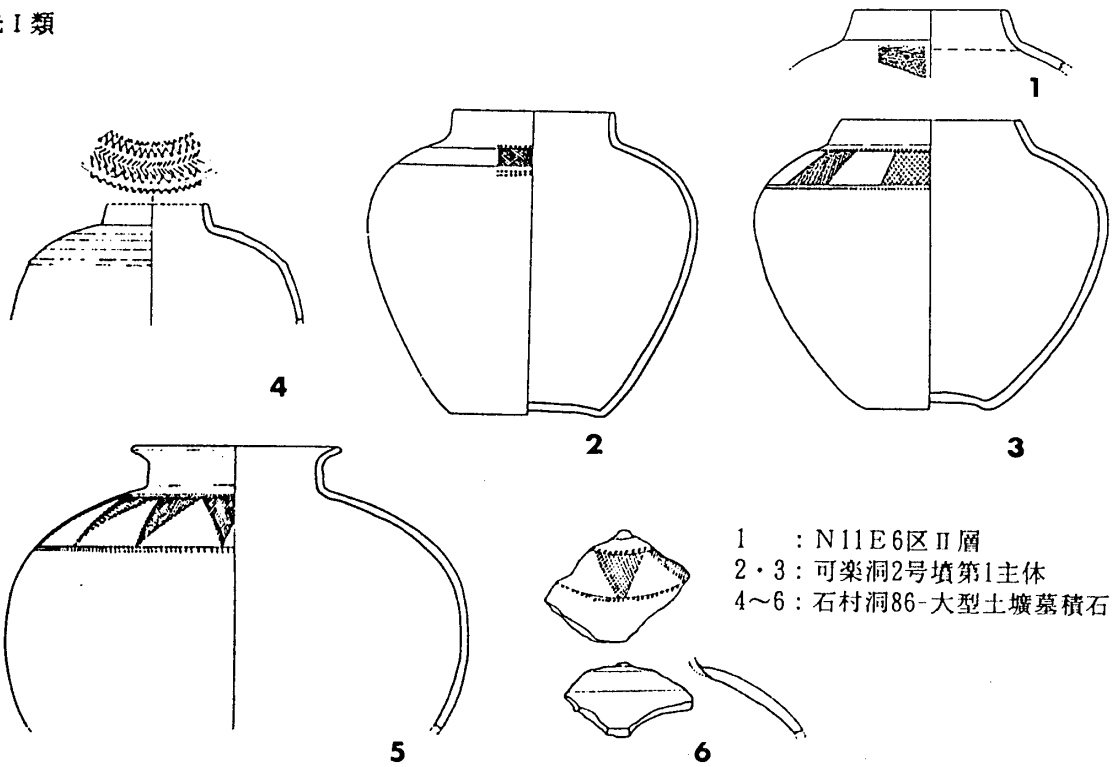
**肩部紋様帯** 斜格子紋・波線紋・櫛描紋に大別され, 波線紋は横走沈線2条の間に波状沈線1条を巡らす波線紋a1, 横走沈線3条と波状沈線2条を交互に配する波線紋a1—1, 横走沈線2条の間に波状沈線2条を巡らす波線紋a2, 横走沈線1条の下に波状沈線2条を巡らす波線紋b1, 波状沈線2条のみを巡らす波線紋b2に細分できる(表2)。櫛描紋は点数が少ないので, 分類を保留する。波線紋には横走沈線が紋様帯区画を意味するもの(波線紋a)としないもの(波線紋b)とがあるが, 斜格子紋では横走沈線間を斜行沈線で1本1本埋めていくのに対し, 波線紋では横走沈線と波状沈線の差は回転する器体に対する工具の上下動の有無に過ぎないことを考えると, 横走沈線で区画された紋様帯の内容が斜行沈線(斜格子紋)から波状沈線(波線紋a)に置換された後, 横走沈線が区画としての意味を失う(波線紋b)という変化(恐らく施紋順序の変化を伴う)を予想させる。即ち, <斜格子紋→波線紋a→波線紋b>である。波線紋bではいずれも波状沈線が2条であるから, さらに<斜格子紋→波線紋a1→波線紋a1—1→波線紋a2→波線紋b1→波線紋b2>と考えられる。

**器形<法量>と紋様の関係** 既に小口径の個体に斜格子紋が多く, 大口径の個体に波線紋・櫛描紋が多いという指摘[88年報告:99—102頁]がある。実測図を参照できない個体もあるので, 報告書の「属性一覧表」により, 器形を口径で代表させて紋様との相関を模式的に示す(表3)。母集団が小さい上, 人為的な誤差(極端な大口径は小片からの推定)をも考慮せねばならない。波線紋a・櫛描紋をもつ個体は口径11～16cmの範囲(丸底球形に対応)に分布するが, 斜格子紋をもつ個体は口径の個体差が大きく, 4～9cm(平底扁球形に対応), 9～10cm(扁球形に対応), 10～12, 14～16cm(球形に対応)に分布し, 細分できそうである。後続する波線紋をもつ個体にもみられる丸底球形(口径10cm以上)が新しく, 器形(法量)・調整が最も隔たった平底扁球形(口径4～9cm)が古いと考えられる。また, 波線紋b1をもつ個体は口径計測が可能な例を欠くが, 波線紋aをもつ個体よりは小さく, 波線紋b2をもつ個体(全て他地域出土)よりは大きいようである(挿図5—3)。

**遺構での在り方** 直口短頸壺の確実な複数伴出例は少ないが, 共伴する個体は法量が近似し, 異紋様同士では斜格子紋片と波線紋a1片が石村洞3号墳で, 波線紋a1をもつ個体と波線紋a1—1をもつ個体が88—4号貯蔵坑で伴出しており, 先の想定と矛盾するものではない。

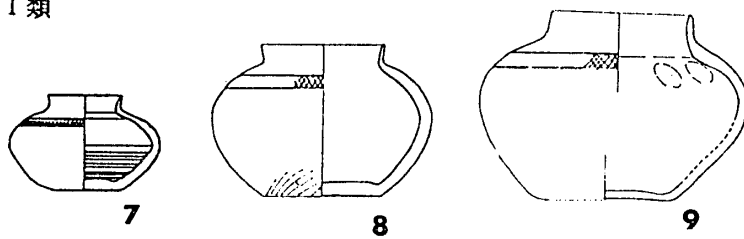
**分類** 以上より, 斜格子紋をもつ平底扁球形の個体をI類, 斜格子紋をもつ丸底扁球形・丸底球形の個体をこの器種に叩き技法が採用されてから器形(法量)が丸底球形に安定するまでの段階としてそれぞれII—1・II—2類, 波線紋a1・波線紋a1—1をもつ個体を紋様が波線紋に置換されてから波線紋a2に定型化するまでの移行期としてそれぞれIII—1類・III—2類, 波線紋a2をもつ個体をIV類, 波線紋b1・波線紋b2をもつ個体を波線紋a2が崩れていく段階としてそれ

先I類



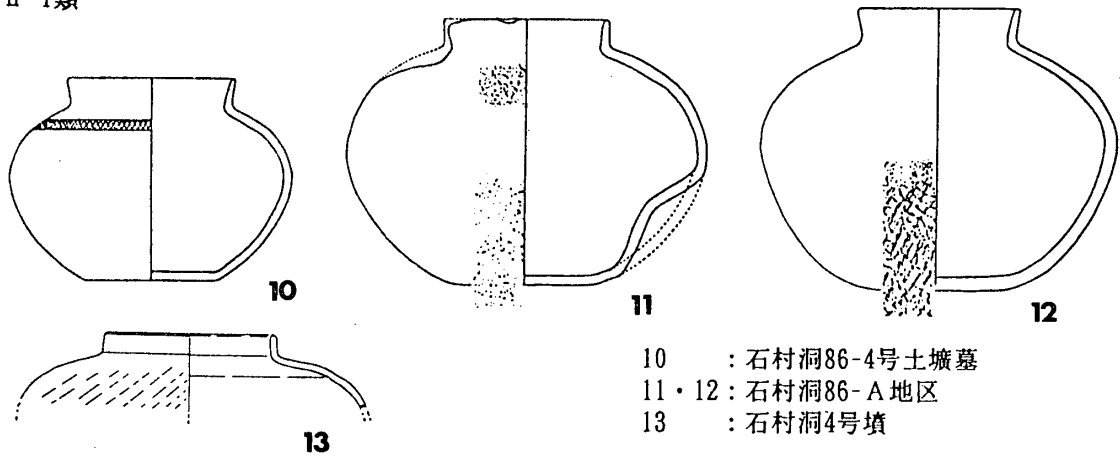
- 1 : N11E6区II層
- 2・3 : 可楽洞2号墳第1主体
- 4~6 : 石村洞86-大型土壙墓積石部

I類



- 7 : 石村洞2号墳付近攪乱層
- 8 : 石村洞破壊墳探索トレンチ
- 9 : 法泉里2号墳

II-1類



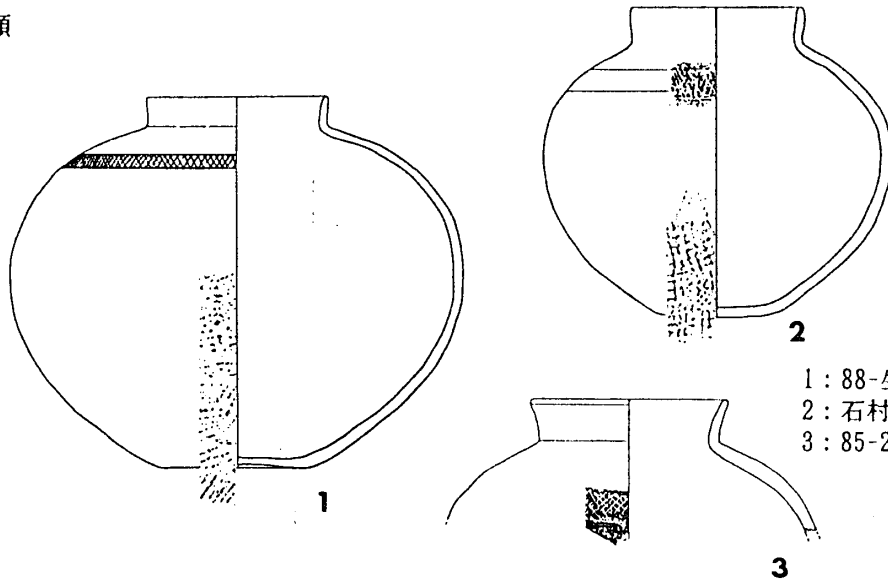
- 10 : 石村洞86-4号土壙墓
- 11・12 : 石村洞86-A地区
- 13 : 石村洞4号墳



挿図3 直口短頸壺の分類(1)

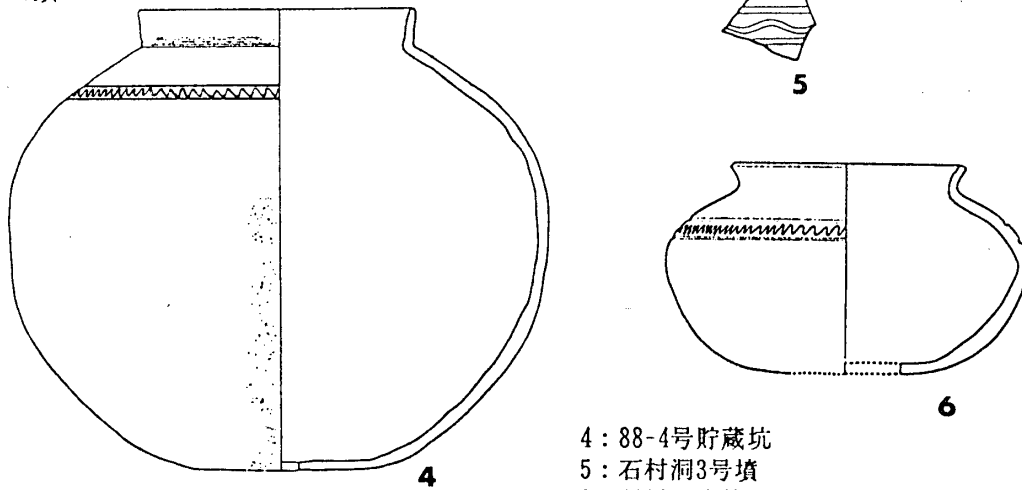


Ⅱ-2類



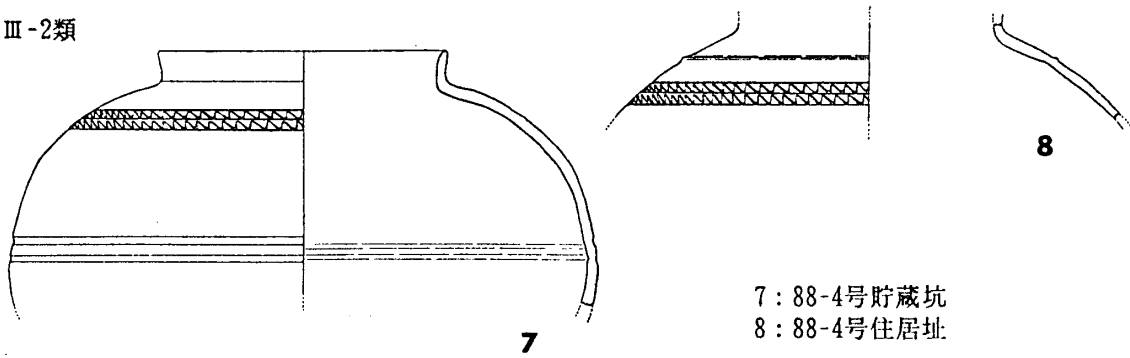
- 1: 88-生活面遺構
- 2: 石村洞86-3号土壇墓
- 3: 85-2号住居址v層

Ⅲ-1類



- 4: 88-4号貯蔵坑
- 5: 石村洞3号墳
- 6: 対馬・恵比須山7号石棺

Ⅲ-2類

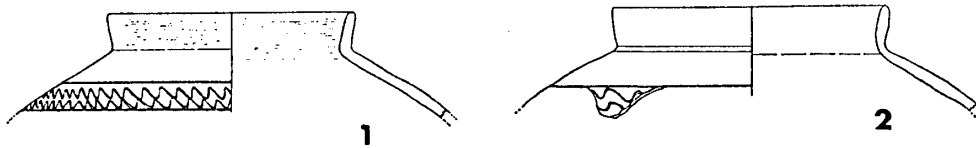


- 7: 88-4号貯蔵坑
- 8: 88-4号住居址



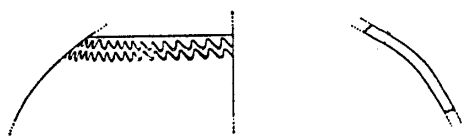
挿図4 直口短頸壺の分類(2)

IV類



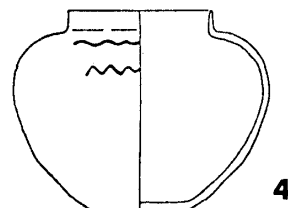
1: 88-4号住居址  
2: 87-3号住居址

V-1類



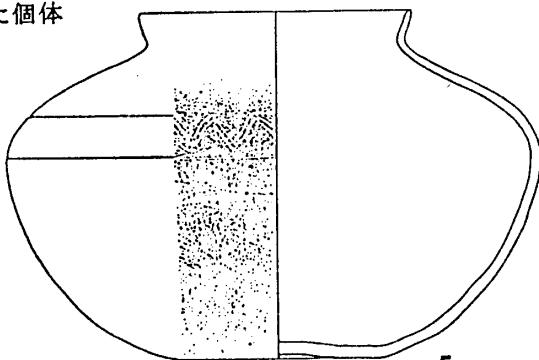
3: 88-4号住居址

V-2類

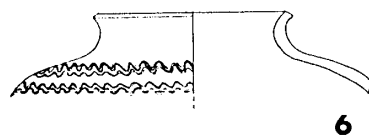


4: 清州・新鳳洞13号土壙墓

櫛描紋を  
施した個体



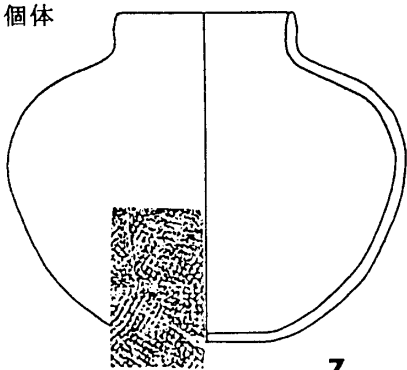
5



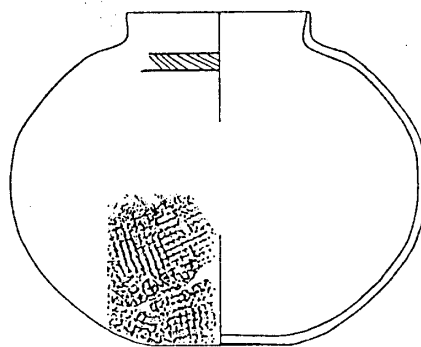
6

5: 石村洞86-9号土壙墓  
6: 89-1号貯蔵坑

器形によって  
分類する個体



7



8

7: 石村洞2号墳  
8: 石村洞破壊墳探索トレンチ

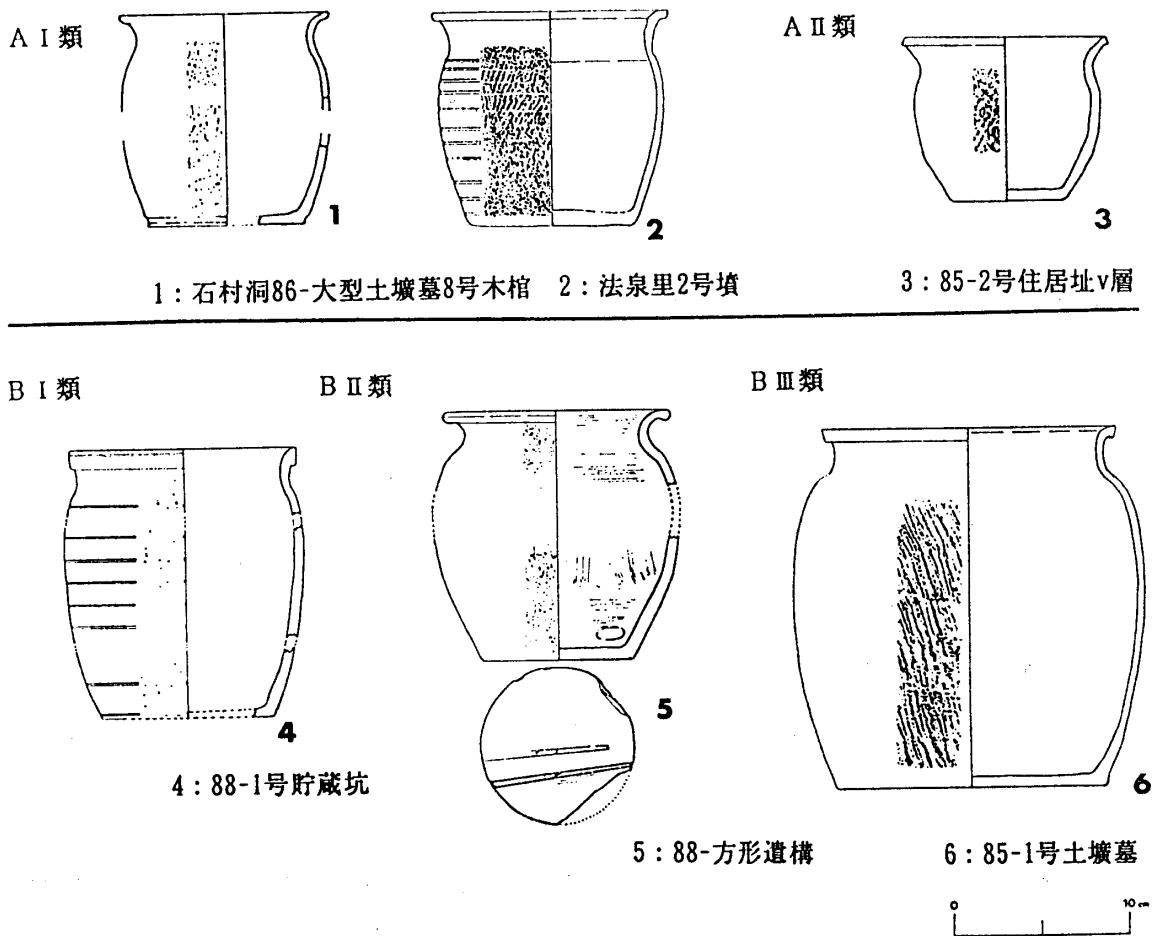


挿図5 直口短頸壺の分類(3)

ぞれV-1類・V-2類とする。即ち、＜I類→II-1類→II-2類→III-1類→III-2類→IV類→V-1類→V-2類＞である（挿図3～5）。肩部紋様帯をもたない個体（挿図5-7）、肩部紋様帯が連続短斜線紋（斜格子紋の欠画とおもわれる）をもつ個体（挿図5-8）も、器形により分類する（前者はII-1類、後者はII-2類）。また、I類の祖型として、やや断絶は感じるが、可楽洞2号墳・石村洞86-大型土壇墓積石部等出土黒色磨研土器（挿図3-1～6）を想定し、これを先I類とする。先I類が定森編年「I類」に、I類が「II類」の一部に、II-1類・II-2類が「II類」の一部と「III類」に、III類以降が「IV類」に当たる。

属性間の相関関係から、＜小口径・波線紋・軟質→大口径・斜格子紋・硬質＞とする意見もある〔88年報告：99-103頁〕が、既に指摘した通り、軟質であることは古さを保証しないと思われる。高句麗土器との共伴例も、ほとんど波線紋a2をもつ個体のみである。

蚕室地区百濟土器で、叩き目等が紋様効果をもたらす場合を除けば、紋様を有する器種はこの直口短頸壺と一部の広口長頸壺、筒形器台が主なものであり、黒色磨研土器を祖型としたり、時期が下ると軟質化し、時期による法量差が大きく（口径では最大3倍）、底部に穿孔された個体までみ



挿図6 平底鉢の分類

られることから、実用品ではなく特殊用途の土器と思われる。

② 平底鉢

蚕室地区百濟古墳や清州・新鳳洞古墳群でも出土し、日本出土韓式系平底鉢もこれに類するが、古墳副葬品や韓式系土器では口縁部の肥厚しないものが多いのに対し、夢村土城内出土例には口縁部の肥厚するものも多い。口縁部肥厚如何は法量と相関するようである〔88年報告：116—117頁〕ので、口縁部が肥厚せず外折する比較的小型のA類と、口縁部が肥厚する比較的大型のB類に分類する。

**平底鉢A類** 最大径を中位にもつ丸みを帯びた胴部が縮約して頸部をなしたのち外折するAⅠ類、頸部をなさずに縮約後外折するAⅡ類からなる(挿図6—1~3)。AⅠ類は法泉里2号墳に、AⅡ類は石村洞古墳群と夢村土城内にみられ、〈AⅠ類→AⅡ類〉と考えられる〔小田1983a〕。

**平底鉢B類** 口縁部が外傾し、端部で肥厚して外側に広い面をもつBⅠ類(頸部に長短あり)、口縁部が強く外反するBⅡ類、口縁部が直立して頸部状となり、端部で外側に断面四角形状に肥厚するBⅢ類からなる(挿図6—4~6)。BⅠ類短頸は石村洞古墳群でもみられるが、BⅠ類長頸・BⅡ類・BⅢ類は夢村土城内でのみみられるので、〈BⅠ類→BⅡ類→BⅢ類〉と大型化すると考えられる。

**A類・B類の関係** BⅠ類が器形・法量においてAⅡ類に近く、またAⅡ類はBⅠ類長短頸のいずれとも共伴例があるので、〈AⅠ類→AⅡ類→AⅡ類・BⅠ類→BⅡ類→BⅢ類〉と考えられる。

③ 三足盤

定森秀夫の分類案〔1989〕に沿いつつ、三足盤をA類・B類・C類に分ける。

**三足盤A類** 平底から斜外方へ立ち上って受部状をなし、直線的な口縁部をもつもので、突帯等の装飾がほとんどない。直立口縁部が端部で外折するAⅠ類、口縁部が外に折れなくなるAⅡ類、口縁部がやや外傾するようになるAⅢ類、中央が垂れ下がった感じの底部から外傾して立ち上がり、ほとんど内折せずに口縁部に至るAⅣ類、受部をなした部分が底部近くの沈線にまで退化したAⅤ類に5分できる(挿図7—1~10)。大半が高句麗土器と共伴するが、受部状の部分が退化していくとみて、〈AⅠ類→AⅡ類→AⅢ類→AⅣ類→AⅤ類〉の序列が考えられる。定森編年「A系」に当たる。

**三足盤B類** 突帯をめぐらし、腹部が膨らまず肩をなさない。例が少なく、土壙墓(85—2号土壙墓)や小積石塚(88—1号積石遺構)での出土から、A類の副葬用の変異かと思われる。A類の細分を援用し、BⅠ類・BⅢ類・BⅣ類とする(挿図7—11~15)。BⅠ類が定森編年「B系1類」、BⅢ類が「B系Ⅱ類」に当たる。

**三足盤C類** 腹部に丸みがあり、突帯をもつもので、定森編年「B系Ⅲ類」・「B系Ⅳ類」に当たるが、類例が増加し、新たな理解が必要と思われるのでB類とは別に扱う。底部が平たく、比較的浅く横長で胴部が丸く張り、口縁部直下に突帯を巡らすCⅠ類、やや深めて胴部の張りが甘く

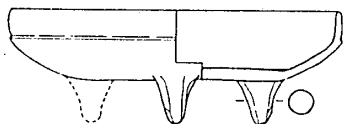
A I 類



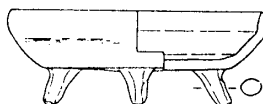
1

1 : 88-4号貯蔵坑

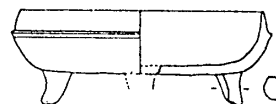
A II 類



2



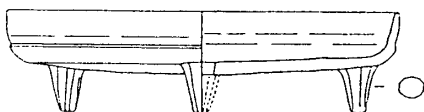
3



4

2・3 : 88-1号貯蔵坑  
4 : 87-1号住居址iii層

A III 類



5



6

5 : 85-2号土壙墓  
6 : 88-6号貯蔵坑

A IV 類



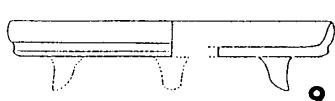
7



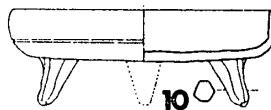
8

7・8 : 88-方形遺構

A V 類



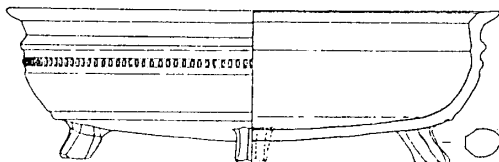
9



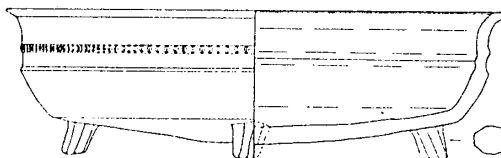
10

9 : 87-「廃棄場」  
10 : 89-1号貯蔵坑

B I 類



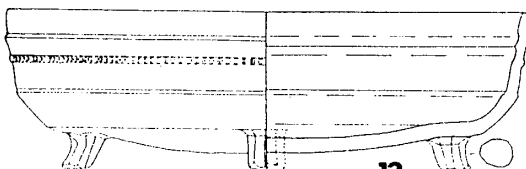
11



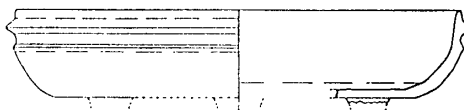
12

11・12 : 85-2号土壙墓

B III 類



13



14

13 : 85-2号土壙墓  
14 : 87-9号貯蔵坑

B IV 類

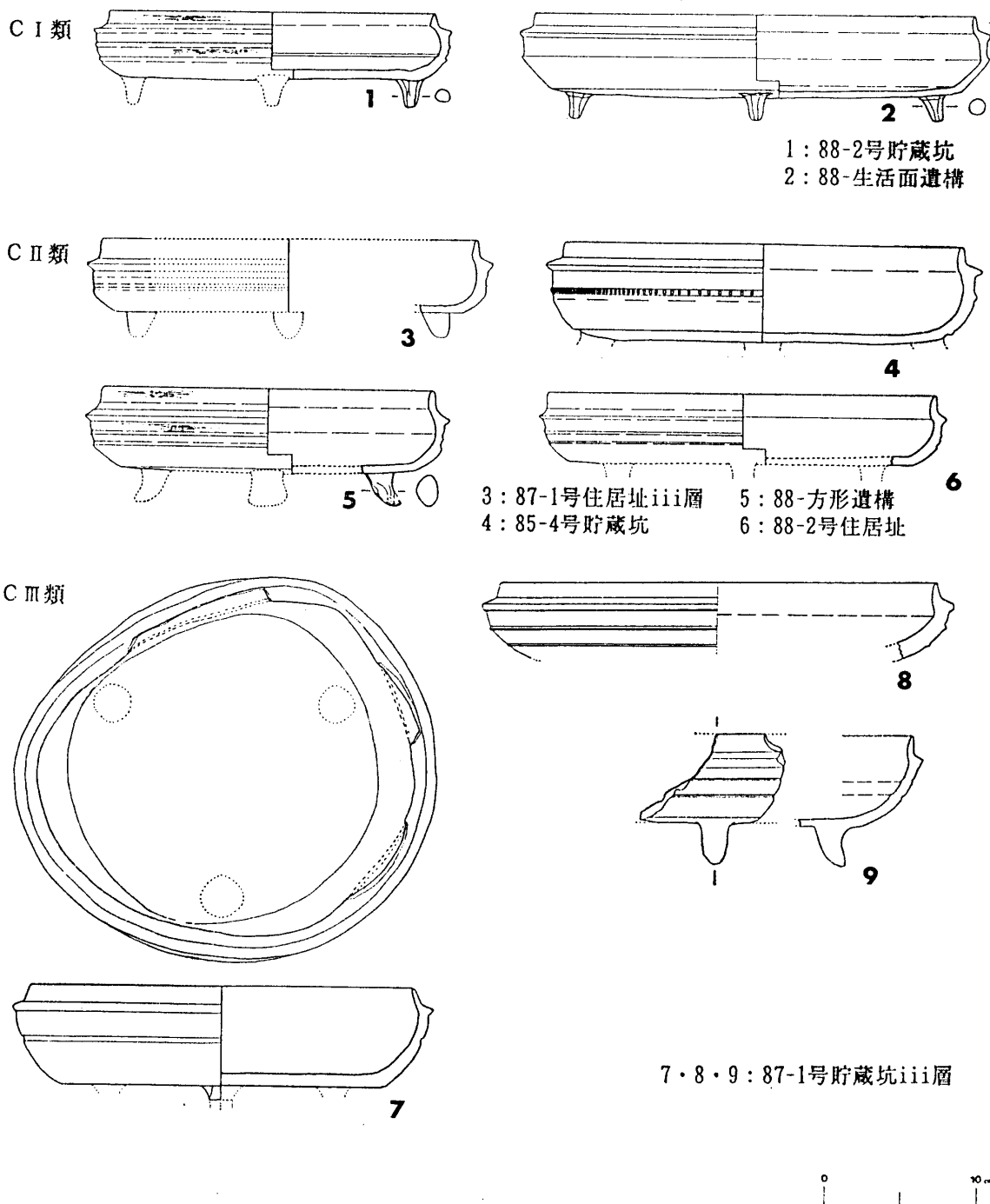


15

15 : 88-1号積石遺構



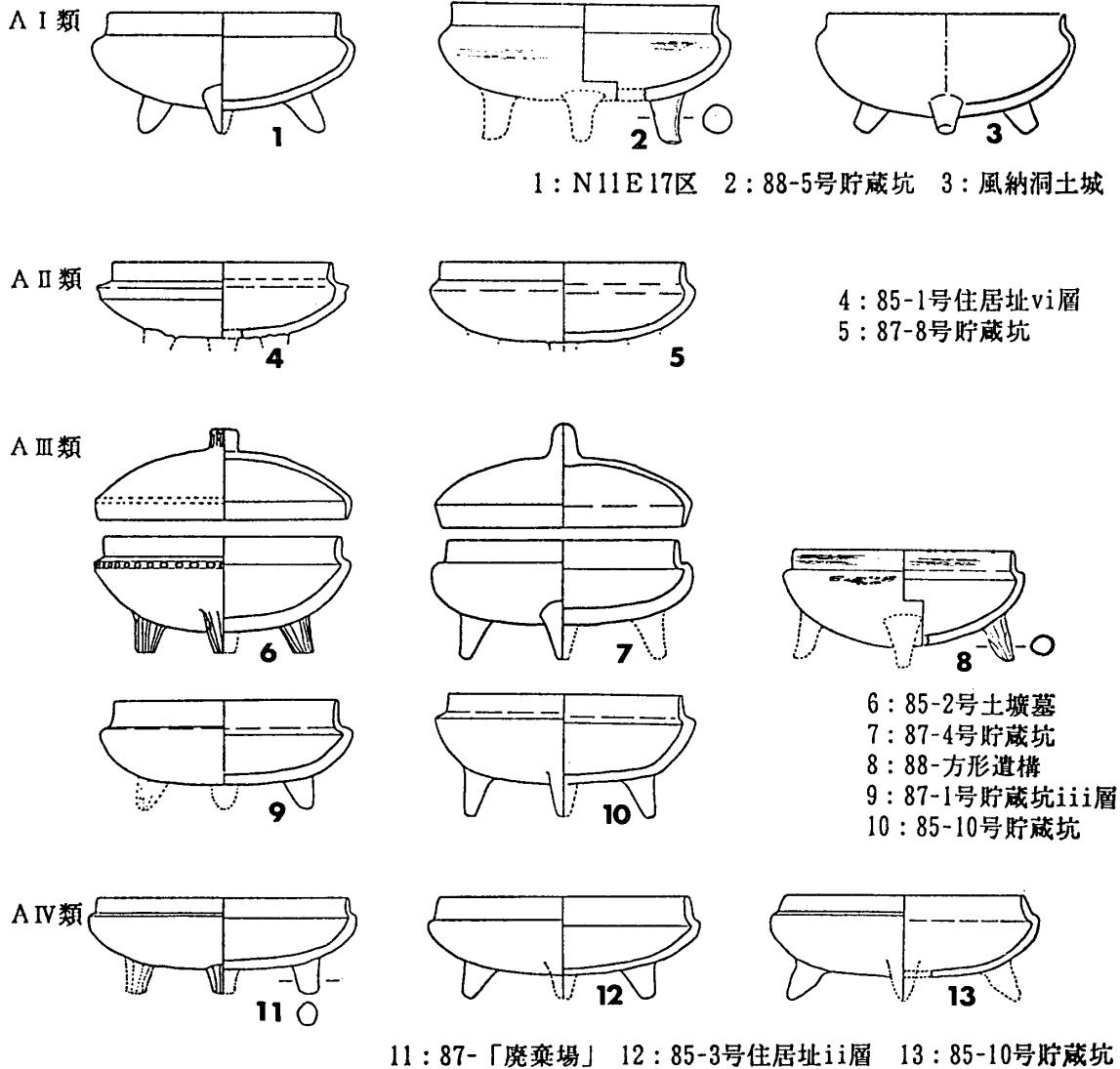
挿図7 三足盤の分類(1)



挿図8 三足盤の分類(2)

なり、肩をなさないC II類、底部から曲線的に立ち上がって胴部が張らず、口縁部が内傾するC III類がある(挿図8)。C II類が定森編年「B系Ⅳ類」、C III類が「B系Ⅲ類」に当たるが、C II類・C III類には高句麗土器との共伴例があり、<C I類→C II類→C III類>かと思われる(定森編年とは逆順)。

④ 三足杯



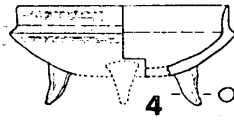
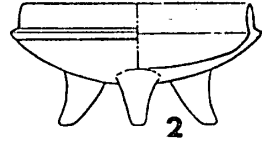
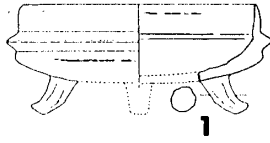
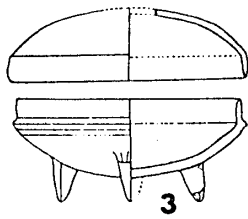
挿図9 三足杯の分類(1)

定森秀夫の分類案〔1989〕に沿いつつ、有蓋のA類・B類・C類（有蓋高杯の同名各類に対応）と無蓋のD類・E類に分ける。杯部の形態によって、A類・B類を細分する。

**三足杯A類** 杯体部が屈曲して肩をなし受部とする有蓋三足杯である。杯体部が下膨れ状で自然に受部を為すA I類、杯体部がやや丸みを失い肩が狭まったA II類、肩が狭く尖り気味となるA III類、肩をほとんどなさず内折するのみとなり、口縁部に内傾するものがでてくるA IV類がある（挿図9）。A III類・A IV類の多くは高句麗土器と共伴するので、〈A I類→A II類→A III類→A IV類〉の序列が想定される。

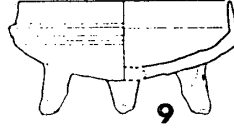
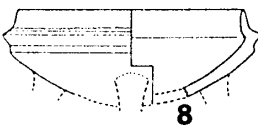
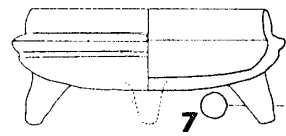
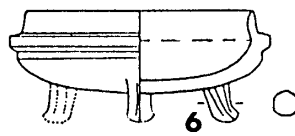
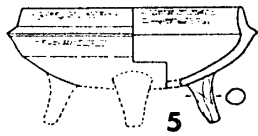
**三足杯B類** 杯底部から連なり短く突出する受部をもつ有蓋三足杯である。口縁部が直立して、受部が外側に小さく突出するB I a類、口縁部が内傾し、受部が水平に突出するB I b類、口縁部

B I a類



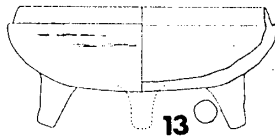
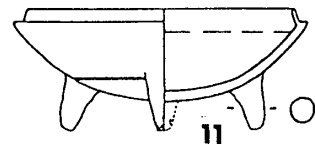
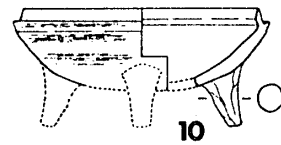
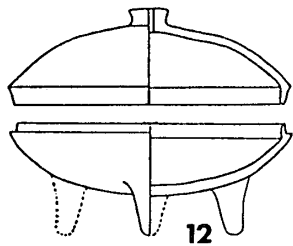
- 1: S11W6区「盛土層」
- 2: 風納洞土城
- 3: 85-2号土城墓
- 4: 88-6号貯蔵坑

B I b類



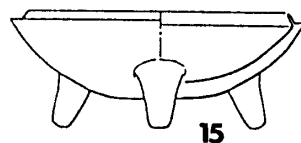
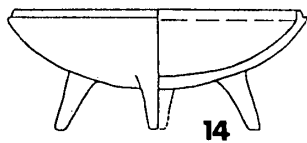
- 5: 88-1号貯蔵坑
- 6: 87-1号貯蔵坑iv層
- 7: S11W6区「百済層」
- 8: 88-方形遺構
- 9: 佐賀県・野田遺跡

B II類



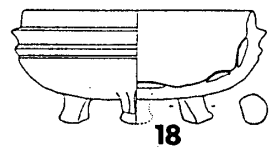
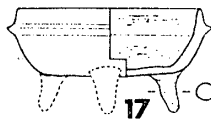
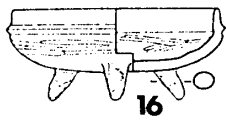
- 10: 88-方形遺構
- 11: 87-2号住居址iii層
- 12: 87-1号住居址vi層
- 13: S11W6区「盛土層」

B III類

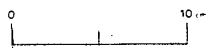


- 14: 85-10号貯蔵坑
- 15: 風納洞土城

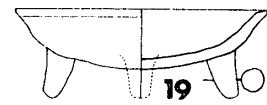
C類



- 16: 88-4号住居址「使用面」
- 17: 88-2号住居址
- 18: 87-3号貯蔵坑



D類



- 19: S20W3区

E類



- 20: S11W6区「百済層」

挿図10 三足杯の分類(2)



が小さくなり、受部がやや上方に尖るBⅡ類、口縁部がさらに短く内傾し、三足がやや細長く、開きが大きくなるBⅢ類に分かれる(挿図10—1~15)。BⅠa類が定森編年「B系Ⅰ類」に、BⅡ類が「B系Ⅱ類」に、BⅢ類が「B系Ⅲ類」にあたる。BⅠa類のみが高杯B類(特にBⅢ類)との類似を示し、共伴例もある(88—6号貯蔵坑)ので、高杯類BⅢの杯部に三足をつけることによって三足杯B類が成立したと考えることができよう。また、三足杯AⅠ類・AⅡ類との共伴例はなく、AⅢ類はBⅠa類・BⅠb類・BⅡ類と、AⅣ類はBⅢ類と、それぞれ共伴例があるので、三足杯A類の変遷、高杯B類(杯部相同)との親縁性から、<BⅠa類→BⅠb類→BⅡ類→BⅢ類>の序列が考えられる。

**三足杯C類** 断面三角形の突帯状の受部をもつ有蓋三足杯である(挿図10—16~18)。点数が少なく、高杯CⅢ類の杯部に三足をつけた形態と思われる。

**三足杯D類** 丸底からそのまま大きく開く無蓋三足杯である(挿図10—19)。

**三足杯E類** 丸い体部をもち、口縁部直下に沈線を1条巡らす無蓋三足杯である(挿図10—20)。

⑤ 高杯

高杯は受部作出法を基準として有蓋のA類・B類・C類(三足杯の同名各類に対応)と無蓋のD類に分類する。有蓋高杯(A類・B類・C類)は夢村土城・風納洞土城から出土しているが、高杯D類だけは石村洞古墳群からの出土例も知られている。以下、主に杯部形態により細分する。

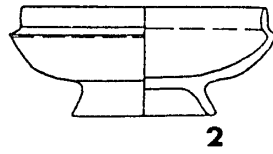
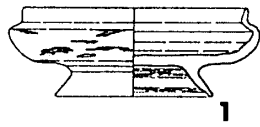
**高杯A類** 杯体部が屈曲して肩をなし受部とする有蓋高杯である(挿図11—1・2)。点数が少なく、三足杯A類の杯部に台脚を付したものとと思われる。とすると、口径が三足杯並みに大きく肩をなすもの(挿図11—1)が、三足杯AⅡ類からの分化直後形態と考えられる。

**高杯B類** 杯底部から連なり短く突出する受部をもつ有蓋高杯である。平底から直線的に立ち

表4 高杯の杯部形態と脚部形態の対応

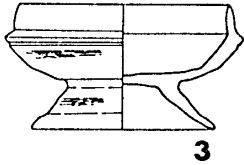
	短脚a	短脚b	短脚c	長脚a	長脚b	長脚c
A類	+				+	+
BⅠ類				+		
BⅡ類					+	
BⅢ類					+	
BⅣ類		(+)				+
CⅠ類	+					
CⅡ類	+					
CⅢ類	+					
CⅣ類	+	+	+			+
D類	+				+	+

A類



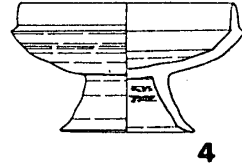
1: 88-3号貯蔵坑  
2: 87-2号住居址iv層

B I類



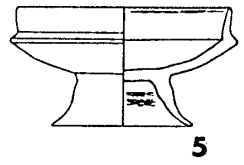
3: 88-7号貯蔵坑

B II類



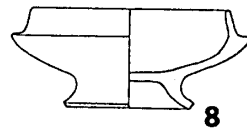
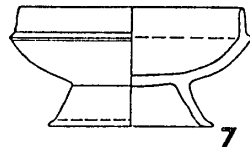
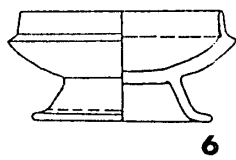
4: 88-4号貯蔵坑

B III類



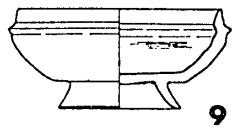
5: 88-6号貯蔵坑

B IV類



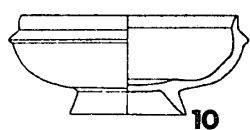
6: 87-「廃棄場」 7: 85-10号貯蔵坑 8: 85-3号貯蔵坑

C I類



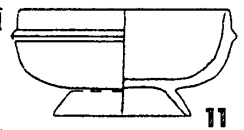
9: 88-4号貯蔵坑

C II類



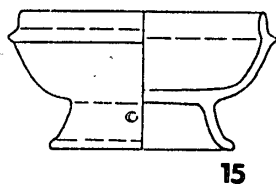
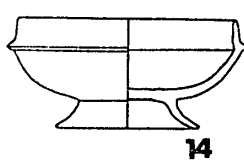
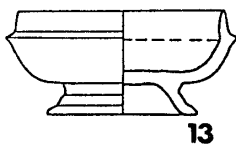
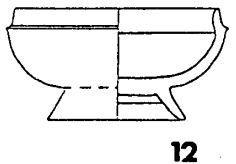
10: 88-生活面遺構

C III類



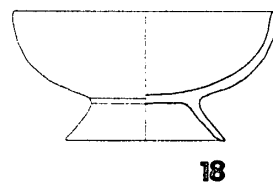
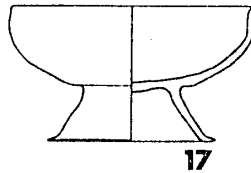
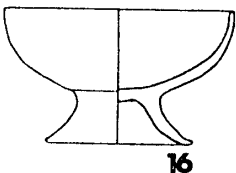
11: 87-5号貯蔵坑

C IV類



12: 87-6号貯蔵坑  
13: 87-2号住居址iii層  
14: 85-1号土壇墓  
15: 85-10号貯蔵坑

D類



16: 85-2号住居址v層 17: 85-10号貯蔵坑 18: 89年報告図面15-⑥



挿図11 高杯の分類

上がる杯体部をもつBⅠ類、屈折はするがBⅠ類ほど強く折れない杯体部をもつBⅡ類、曲線的でやや浅目の杯体部からやや長目の口縁部が延びるBⅢ類、曲線的な杯体部と内傾口縁をもつBⅣ類がある(挿図11—3~8)。杯部の屈曲が失われるとみると、BⅢ類・BⅣ類間にやや飛躍は感じられるが、〈BⅠ類→BⅡ類→BⅢ類→BⅣ類〉と考えられる。

**高杯C類** 断面三角形の突帯状の受部をもつ有蓋高杯である。平底から直線的に立ち上がり、体部中位に突帯を巡らしてから直立し、口縁端部の尖るCⅠ類、杯体部下半が丸みを帯び、口縁部が長くなり端部で尖るCⅡ類、杯底部から曲線的に立ち上がり、直立口縁が丸く終わるCⅢ類、口縁部が内傾して延びるCⅣ類がある(挿図11—9~15)。杯部が丸みを帯びていくとみると、〈CⅠ類→CⅡ類→CⅢ類→CⅣ類〉と考えられる。

**高杯D類** 装飾のない無蓋高杯である。点数が少なく、細分は保留する(挿図11—16~18)。石村洞86—石槨墓では高杯D類とともに、ほぼ同法量の加飾無蓋高杯が出土している(挿図12—32・33)。後者は新羅系土器であり、百濟土器高杯D類に新羅系の装飾が施されたものとみられる。

**脚部形態との関係** 脚部形態も杯部形態による分類に対応している。即ち、脚部を短脚a(短く直線的に開く)・短脚b(短く曲線的に開く)・短脚c(短く直線的に開き端部で外折して接地面をもつ)・長脚a(長く直線的に開く)・長脚b(長く曲線的に開くか端部で少し外折する)・長脚c(長く直線的に開き端部で外折して接地面をもつ)に分類し、杯部の分類と対比しても、特に矛盾はない(表4)。B類・C類でそれぞれ最も新しそうなBⅣ類・CⅣ類とともに長脚cがみられることも先の組列を支持し、長脚cをもつ各類高杯が相近い時期のものであることを示唆している。このことは節を改めて述べる。

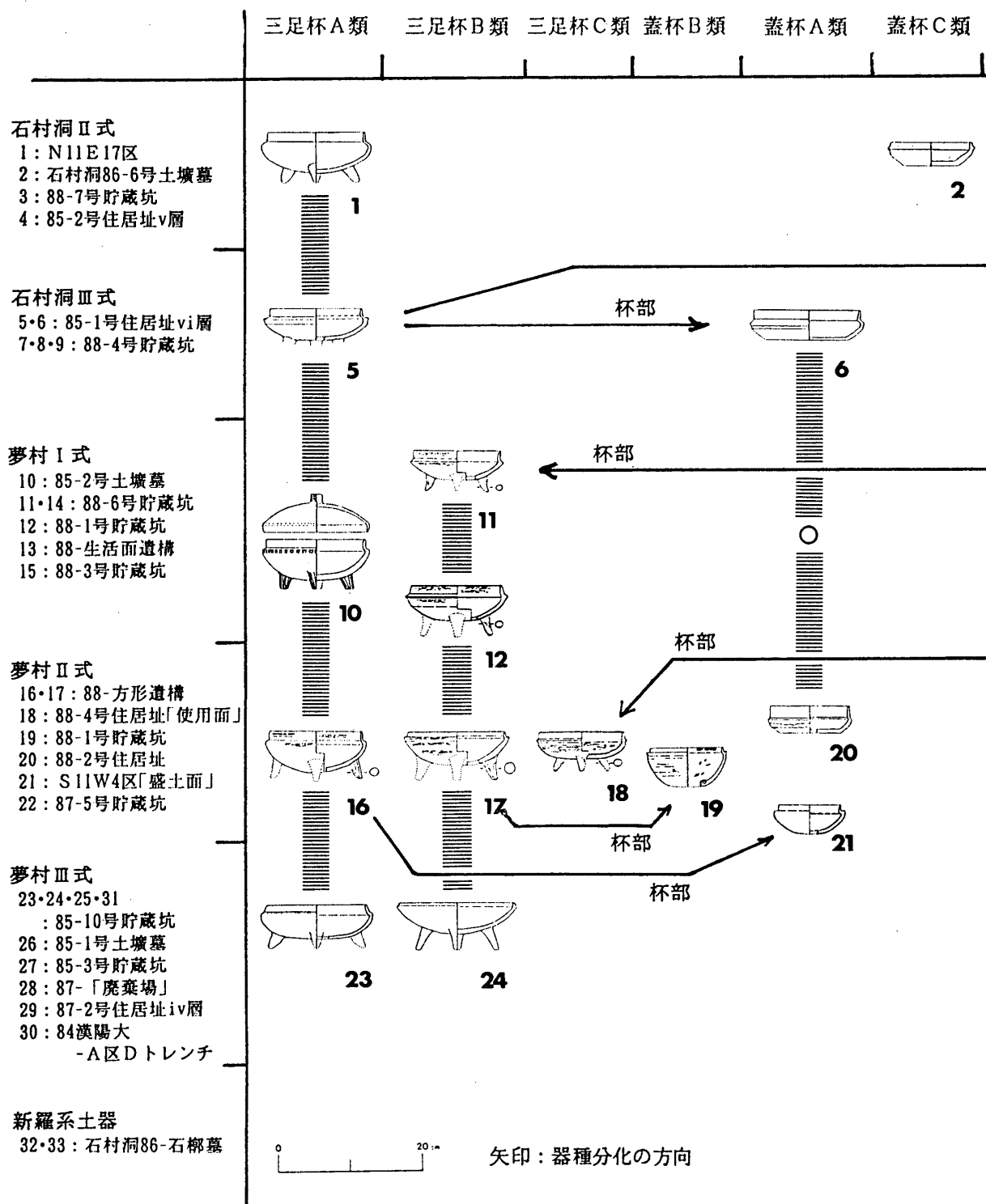
**遺構での在り方** BⅡ類とCⅠ類、BⅣ類(+長脚c)とCⅣ類(+長脚c)の共伴例がある。直口短頸壺との関係では、BⅡ類・CⅠ類が直口短頸壺Ⅲ—1類・Ⅲ—2類と、BⅢ類が直口短頸壺Ⅳ類と共伴し、これも矛盾しない。

### (3) 高杯・蓋杯・三足杯の型式学的関係性

高杯・三足杯について触れた器種間の関係をまとめてみる。

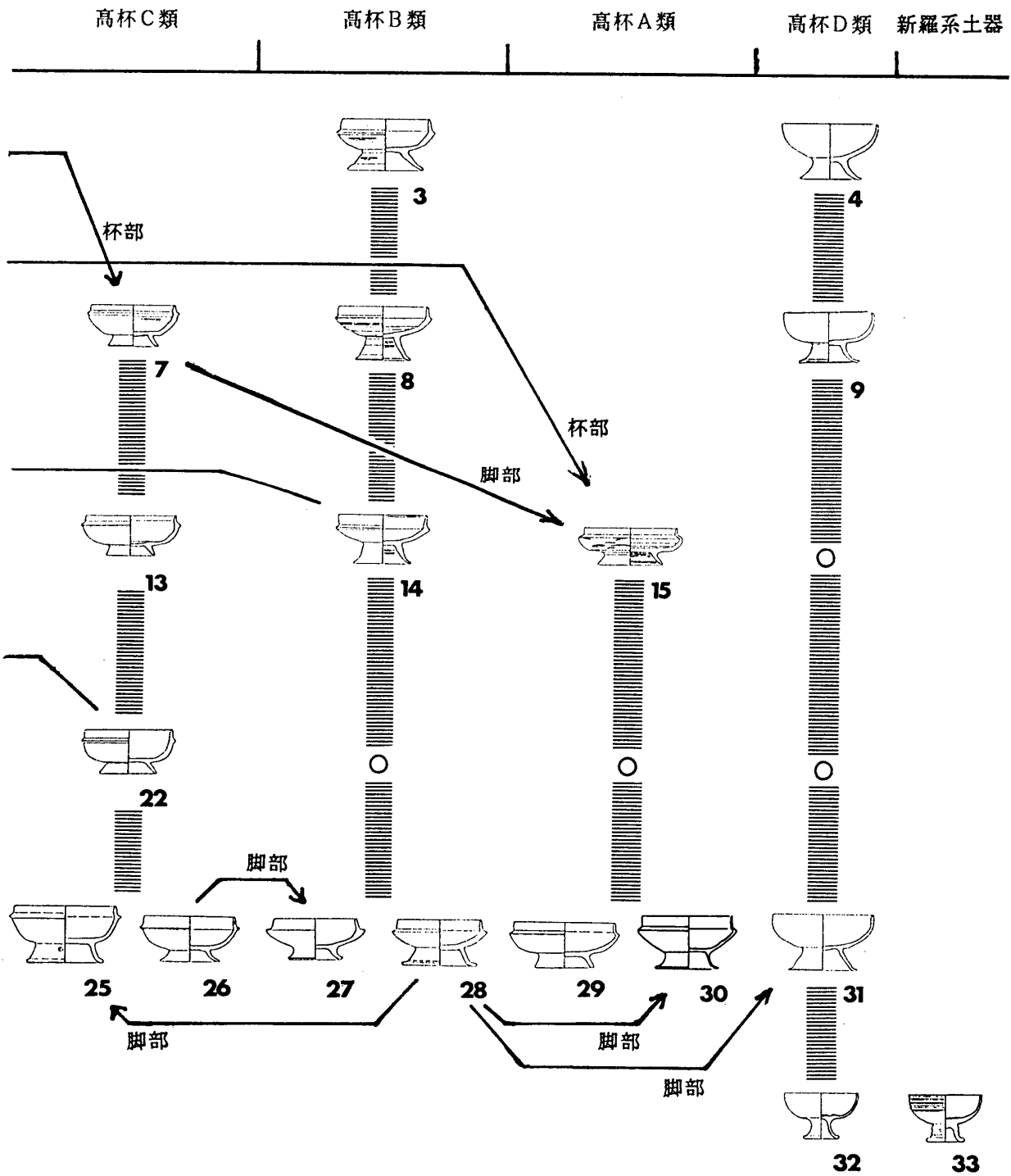
器種間の相同な属性がより似ているものを分化直後とし、器種内の小器種間で受部作出法の違いを越えて相似性が強まったものを新しいとすると、挿図12のような関係が想定できる。横に並ぶ土器は共伴関係により同時性が保証されるので、便宜上後述の型式名を付記したが、図の都合上、所属型式の不明瞭なものを挙げている(1・5・6)。矢印は器種分化の方向を示し、参考のため、蓋杯も受部作出法により分類・配置した(名称は高杯・三足杯の各類を援用)。

図によって、台脚・三足の接合如何による器種分化が石村洞Ⅲ式~夢村Ⅲ式期においてみられることが分かる(この時期は住居址出土資料が主となる時期であり、これ以前の墳墓出土資料が主となる時期にも、同様の関係が成立していた可能性はある)。おそらく、これらの器種は同一工房で作られており、杯部成形後の台脚・三足の接合如何によって器種分化が起こったのであろう。



挿図12 高杯・蓋杯・三足杯の

分化した新器種は、旧器種との型式学的平行性を保たず独自の器種としての変遷を示し、むしろ、高杯同士、三足杯同士の相似性を高めていくとみられる。即ち、分化後の新小器種には、量的に少なく、存続しなかったと思われるもの（蓋杯B類・三足杯C類）もある。一方、各器種には標準的



器種間にみられる型式学的関係

な口径があるようで（蓋杯標準口径<高杯標準口径<三足杯標準口径），新分化の小器種は，旧器種の口径から徐々に新器種の口径に標準化する。この傾向は三足杯B類に著しい。

夢村Ⅲ式には，高杯の杯部・脚部対応の規制が破られて長脚cが高杯各類に現れ，器形が多様に

なる（前掲表4）。また、夢村Ⅲ式には、高杯・三足杯各類を通じて口縁部の内傾するものがみられる。

かかる器種間関係（不断に新器種が出現する）が継続していることは、図示した全型式を通じて、蚕室地区百済土器の陶工に継続性があったことを示している。各器種標準口径への収斂等の器形標準化から、土器需要者にも継続性が認められる。また、高杯D類に新羅土器の装飾が施される現象は、陶工が継続していたのに対し、土器需要者側に変動があったことを示していよう。

#### （4）百済土器の型式設定

主要器種の分類と器種間関係に、その他の伴出土器も加え、遺構での一括出土資料で1時期と認定できるものを基準として蚕室地区百済土器に8型式を設定する。

**可楽洞式**（挿図13—1～4） 可楽洞2号墳，石村洞86—大型土壙墓出土土器をこれに当てる。直口短頸壺先Ⅰ類，平底鉢AⅠ類，叩き技法による球形胴と中程で外折する頸部をもつ短頸壺，平底壺，平坦な天井部をもつ蓋が知られている。原三国時代に近い様相を示している〔朴淳發1989〕。可楽洞2号墳を4世紀前半頃に求める意見があり，妥当と思われる〔金元龍1973：8頁；西谷1980：21頁；小田1983a：149頁；岡内1983：469頁；金元龍1986：183頁；亀田1987：57頁；定森1989：455頁〕。

**法泉里式**（挿図13—5～7） 法泉里2号墳，石村洞86—葺石封土墳，石村洞87—1号石槨墓出土土器をこれに当てる。直口短頸壺Ⅰ類・平底鉢AⅠ類がみられる。法泉里2号墳出土羊形青磁を4世紀後半とするのが通説となっている〔金元龍1975：36頁；小田1979a：202頁；武末1980：450頁；西谷1980：11—12頁；岡内1983：457—460頁；岡内1984〕。

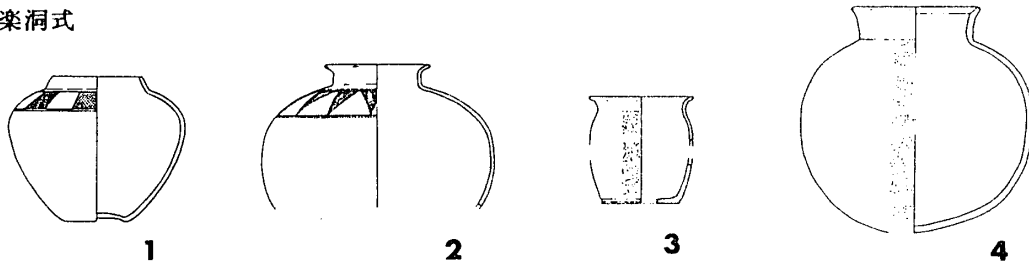
**石村洞Ⅰ式**（挿図13—8・9） 石村洞2・4号墳，石村洞86—4号土壙墓出土土器をこれに当てる。直口短頸壺Ⅱ—1類・平底鉢AⅡ類がみられる。

**石村洞Ⅱ式**（挿図13—10～12） 石村洞積石遺構，石村洞86—3・8号土壙墓出土土器と，夢村土城内では85—2号住居址，85—3号住居址，88—7号貯蔵坑出土土器をこれに当てる。直口短頸壺Ⅱ—2類，平底鉢AⅡ類・BⅠ類，高杯BⅠ類（+長脚a）がみられる。87—8号貯蔵坑での出土例を認めれば，石村洞Ⅱ式に既に三足杯AⅡ類が存在したこととなる。石村洞86—8号土壙墓周辺出土青磁罐が東晋晩期～南朝早期（5世紀前半）のものである〔金元龍・林永珍1986〕。

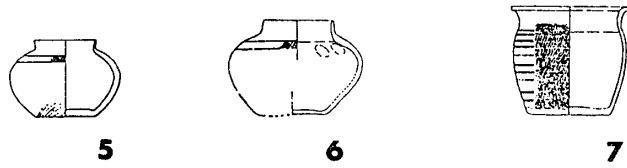
**石村洞Ⅲ式**（挿図13—13～19） 石村洞3号墳出土土器と，夢村土城内の88—2号貯蔵坑，88—4号貯蔵坑出土土器をこれに当てる。直口短頸壺Ⅲ—1類・Ⅲ—2類，平底鉢AⅡ類・BⅠ類，三足盤AⅠ類・CⅠ類，三足杯AⅡ類，高杯BⅡ類（+長脚b）・CⅠ類（+短脚a），D類（+長脚b）がみられ，器台はこの頃からみられる。若干の高句麗土器片も報告されているが，この型式までを百済土器単純期と考えてよい。88—城壁版築土中の出土土器は石村洞Ⅲ式以前のもと思われる。

対馬・恵比須山7号石棺出土土器（挿図4—6）は，器形に問題はあるが，小破片からの復元な

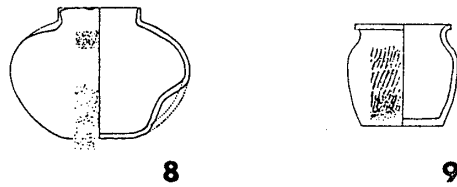
可楽洞式



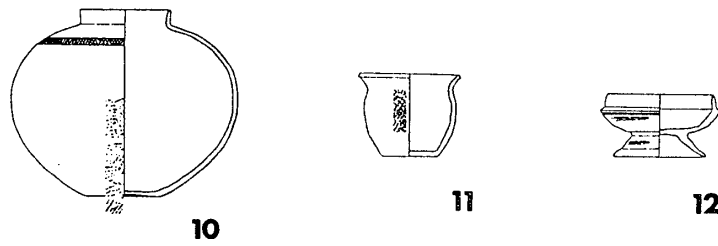
法泉里式



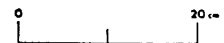
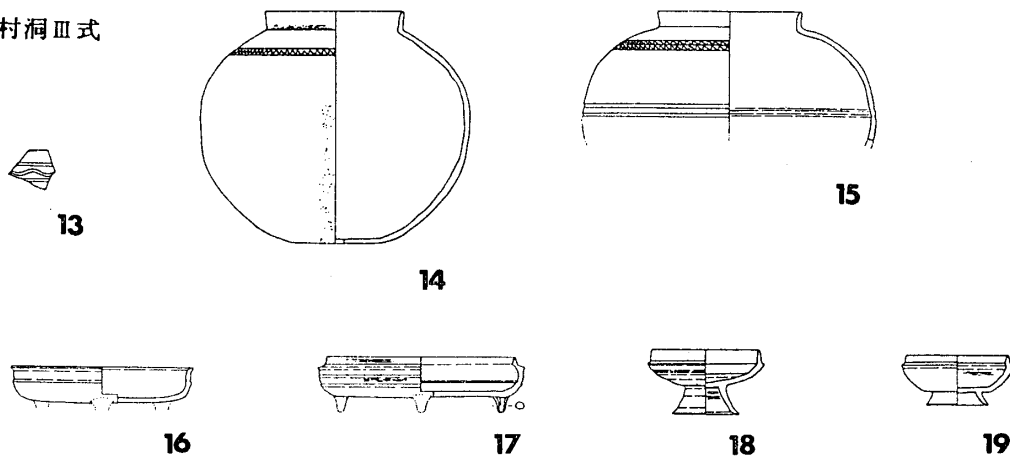
石村洞Ⅰ式



石村洞Ⅱ式



石村洞Ⅲ式



挿図13 蚕室地区出土土器の編年(1)

ので、波線紋 a 1 によって直口短頸壺Ⅲ—1 類（石村洞Ⅲ式）として良からう。この石棺は 5 世紀後葉とされている〔坂田・永留1974：49頁〕。

**夢村Ⅰ式**（挿図14—1～10） 夢村土城内の85—2号土壙墓，88—1号貯蔵坑，88—6号貯蔵坑出土土器をこれに当てる。直口短頸壺Ⅳ類，平底鉢AⅡ類・BⅠ類，三足盤AⅡ類・AⅢ類・BⅠ類・BⅢ類，三足杯AⅢ類・BⅠa類・BⅠb類，高杯BⅢ類（+長脚b）・CⅡ類（+短脚a）がみられる（三足盤C類はCⅡ類らしき口縁部片のみ）。この型式から高句麗土器を多く伴うようになる（挿図14—10）。

佐賀県・野田遺跡出土三足杯（挿図10—9）は三足杯BⅠb類（夢村Ⅰ式）として良からう。これは 5 世紀末から 6 世紀前半とされている〔蒲原・多々良・藤井1985：24—25頁〕。

**夢村Ⅱ式**（挿図14—11～18） 夢村土城内の88—2号住居址，88—1号方形遺構出土品をこれに当てる。平底鉢BⅡ類，三足盤AⅣ類・CⅡ類，三足杯AⅢ類・BⅡ類，高杯BⅢ類（+長脚b？）・CⅢ類（+短脚a）がみられる。直口短頸壺・平底鉢A類の確実な例がなくなり，甗の把手の刻みがみられなくなる。高句麗土器を多く伴う（挿図14—17・18）。

**夢村Ⅲ式**（挿図14—19～25） 細分の可能性はあるが，遺構での一括出土資料を根拠とする関係上，細分は控える。夢村土城内の85—1号土壙墓，85—10号貯蔵坑，89—1号貯蔵坑出土土器をこれに当てる。平底鉢BⅢ類，高杯BⅣ類（+長脚c）・CⅣ類（+短脚a・短脚b・短脚c・長脚c），三足盤AⅤ類・CⅢ類，三足杯AⅣ類・BⅢ類・E類がみられる。高句麗土器を少量伴う。87—2号住居址Ⅳ層出土の蓋は定森編年「高霊Ⅵ段階～Ⅶ段階」（5世紀末～6世紀初）とされている〔1989：450頁〕。下限を，蚕室地区に新羅土器が現れる6世紀中頃におく。

#### （5） 伴出する高句麗土器について

夢村Ⅰ・Ⅱ式には，百濟土器に高句麗土器が伴うことも注目すべきであろう。

高句麗土器が大量に出土した九宜洞遺跡に比べると，やや器種構成が異なるようであるし，夢村土城内では口縁部に沈線を巡らすものが多いこと（夢村Ⅱ式），九宜洞遺跡では口縁部の肥厚する外反口縁の壺・甗が多いことは時期差であろう（挿図14—10，17，18）。九宜洞遺跡出土土器が夢村Ⅰ式伴出の高句麗土器より古い部分を含むようである。高句麗土器の製作地は特定できないにしても，少なくとも高句麗土器使用者が夢村Ⅰ式期に登場し，以後蚕室地区に継続的に存在したことが分かる。

なお，88—1号方形遺構出土高句麗土器四耳長頸壺（挿図14—18）は，緒方泉によるC—Ⅱ型，東潮による中期後葉に当たると思われ，5世紀後葉と考えられる〔緒方1985b；東1988〕。

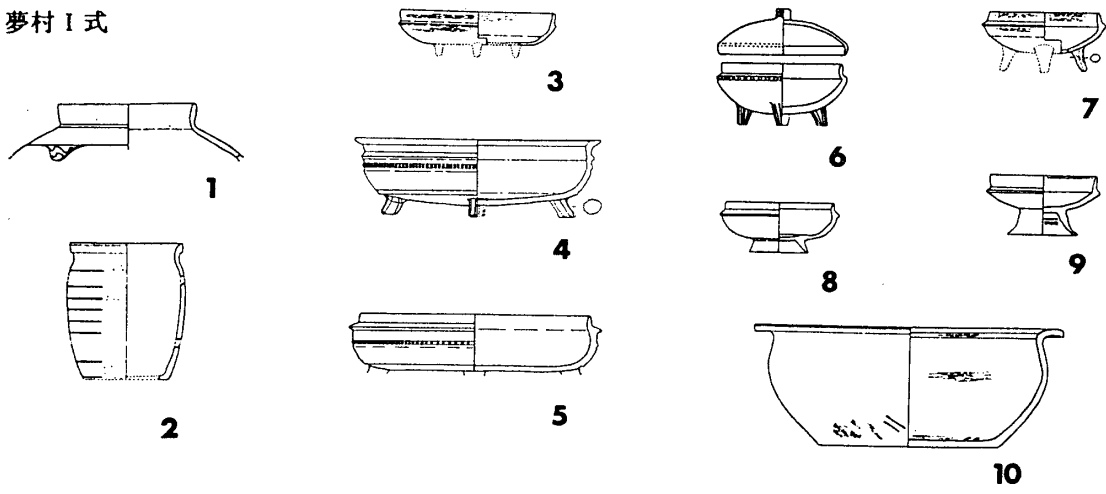
### 4. 夢村土城の考古学的位置

#### （1） 蚕室地区三国時代文化の4期区分

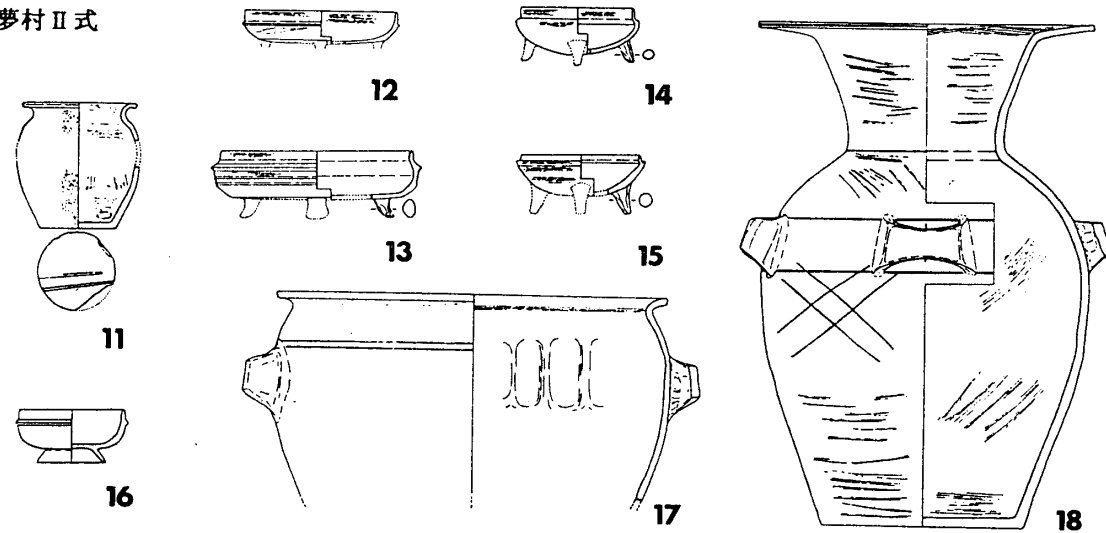
先に設定した8型式は，蚕室地区三国時代墓制の画期により4期に整理できる。



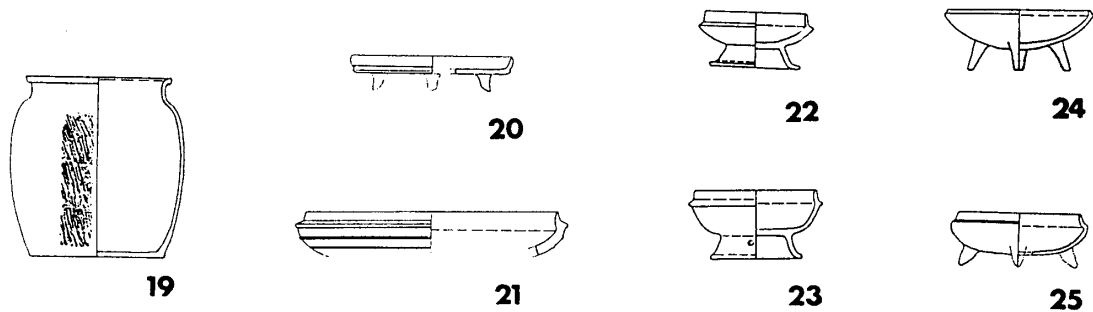
夢村Ⅰ式



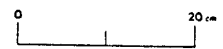
夢村Ⅱ式



夢村Ⅲ式



10, 17, 18のみ高句麗土器



挿図14 蚕室地区出土土器の編年(2)

**蚕室早期**（可楽洞式・法泉里式／4世紀） 法泉里2号墳のような小石槨墓〔金元龍1973〕もみられるものの、王陵級の大型古墳の存在は確認できず、可楽洞2号墳、石村洞破壊墳、石村洞86—1大型土壙墓、石村洞86—葺石封土墳はいずれも集団墓的性格の濃いものである〔尹世英1974；任孝宰1976；金元龍・林永珍1986〕。積石塚は、石村洞1号墳がこの時期に当たる可能性もあるが、封土墳が主体を占める時期とみてよかろう。集団墓に特徴づけられる時期と考え、蚕室早期とする。

**蚕室前期**（石村洞Ⅰ～Ⅲ式／5世紀前・中葉） 石村洞2・3・4号墳のような巨大積石塚と、石村洞3号墳東方地区中層の土壙墓群が知られている。石村洞破壊墳探索トレンチでも石村洞Ⅱ式土器はみられるが、同墳の築造はこの頃までに終了するようである〔任孝宰1976〕。個人を葬る巨大積石塚と小型土壙墓とに分極化した墓制の時期として、蚕室前期とする。

積石塚のうち石村洞4号墳は、既存の封土墳を削りだし、周囲に積石を施す特異な構造であり、石村洞2号墳（石壁を築き、その内側を土で埋める工程を繰り返す）・3号墳（すべて積石による）と異なっている〔金元龍・任孝宰・林永珍 1989：45—47頁〕。

筆者は石村洞2・4号墳を石村洞Ⅰ式に、3号墳を石村洞Ⅲ式に当てるが、通説では石村洞3号墳を4号墳より遡る4世紀とする〔金元龍・李熙濬 1987〕。百濟積石塚が高句麗積石塚を祖型とするからには、より祖型に近そうな石村洞3号墳を古く考えられなくもない。しかし、上に記した各積石塚の構造からみて、従来封土墳を首長墓としたところ（石村洞5号墳等）へ、積石塚という墳墓形態が外面的に受容され（4号墳）、さらに百濟古墳文化中に消化され、百濟積石塚として完成されていく過程（2号墳・3号墳）と考えたい。

傍証として、積石上の瓦の存否が挙げられる。石村洞4号墳で積石上に葺かれていた瓦が検出されており、これは輯安の高句麗積石塚（将軍塚・太王陵等）と同様であるが、2・3号墳では伴う瓦が報告されていない。これも、高句麗積石塚の百濟古墳文化への定着過程とみられよう。

**蚕室中期**（夢村Ⅰ～Ⅲ式／5世紀後葉～6世紀前半） 石村洞古墳群は既に廃絶し、夢村土城内の85—1・2号土壙墓が知られている。高句麗土器が多くみられる時期だが、土壙墓の副葬品には高句麗土器を含まない。王陵級の巨大古墳がみられない時期（可楽洞5号墳をこの時期に当てる意見もある〔亀田 1990〕）として、蚕室中期とする。

**蚕室後期**（新羅系土器／6世紀後半以後） 芳荑洞古墳群等の横穴式石室墳が知られている〔金秉模 1977；定森1989；尹煥 1989〕。新羅系土器を伴う横穴式石室墳の時期として、蚕室後期とする。

## （2） 夢村土城の存続期間

以上4期と対比して、夢村土城の存続期間を考えてみる。

**夢村土城の上限** 夢村土城は蚕室前期中葉（5世紀前葉）から遺構が確認される。本稿では、遺構での共伴関係を重視しているが、遺構以外で4世紀に遡らせるべき遺物が土城内にみられることも事実である。しかし、遺構から遊離した遺物をもって立論すれば、遺跡としての夢村土城の上

限問題からはむしろ遠ざかってしまうのであり、原則上は「解は不定」とでもするしかない。結局は、何らかの歴史像の助けを借りるしかあるまい。とすると、中国陶磁の入手という現象に夢村土城の初源を求めざるを得ない。土城内出土の中国陶磁では、西晋銭紋陶器が年代の根拠としてよく挙げられるが、数量的に乏しく、中国での伝世も考慮せねばならない（石村洞Ⅱ式の85—2号住居址Ⅴ層直下木炭面では、銭紋陶らしき灰釉陶片が六朝青磁片と伴出している）。その点、六朝青磁片には、或いは4世紀に遡りうるものがありそうで、すべてを伝世品と見做す訳にもゆくまい。蚕室早期の法泉里2号墳出土羊形青磁から考えても、夢村土城内出土の六朝青磁が4世紀に遡る可能性は否定できず、土城内に未知の「4世紀の遺構」が存在した可能性は残る。

また、88年調査の版築城壁は蚕室前期末と考えられ、以後遺構が増加しているが、N11E17区では、版築城壁上に2次の木炭面が形成され、1次木炭面からは銭紋陶らしき灰釉陶片と瓦片・「風納洞式粗質有文壺」・「金海式土器」が出土している。土器の実測図は公表されていないが、4世紀に遡る可能性は高く、城壁にも時期差を認めてよさそうだ。未知の「4世紀の遺構」は、数次にわたる城壁再構築によって破壊ないし埋没したと解釈することもできよう。

**夢村土城の変質** 蚕室中期前葉（5世紀後葉）から土城内に高句麗土器が現れ、土城内に小積石塚や土壇墓が造営され、蚕室前期とは土城の機能に若干の変化があったようである。蚕室前期→中期の墓制の画期ともあわせて、当時の社会変動を憶測させる。

**夢村土城の廃絶** 蚕室中期末（6世紀半ば）までで土城は廃絶したらしく、土城内で新羅土器はみられない。蚕室後期には、夢村土城に代わって二聖山城が使用されるようになったと思われる〔金秉模・沈光注 1987・1988〕。やはり、何らかの社会変動が想定される。

### （3） 錦江下流域との関係——蚕室前期・中期の画期と関連して——

南遷後の百濟王都の地とされる錦江下流域とも比較してみよう。この地域には百濟文化のうちでも蚕室地区とは異なるまとまりが存在すると思われる。

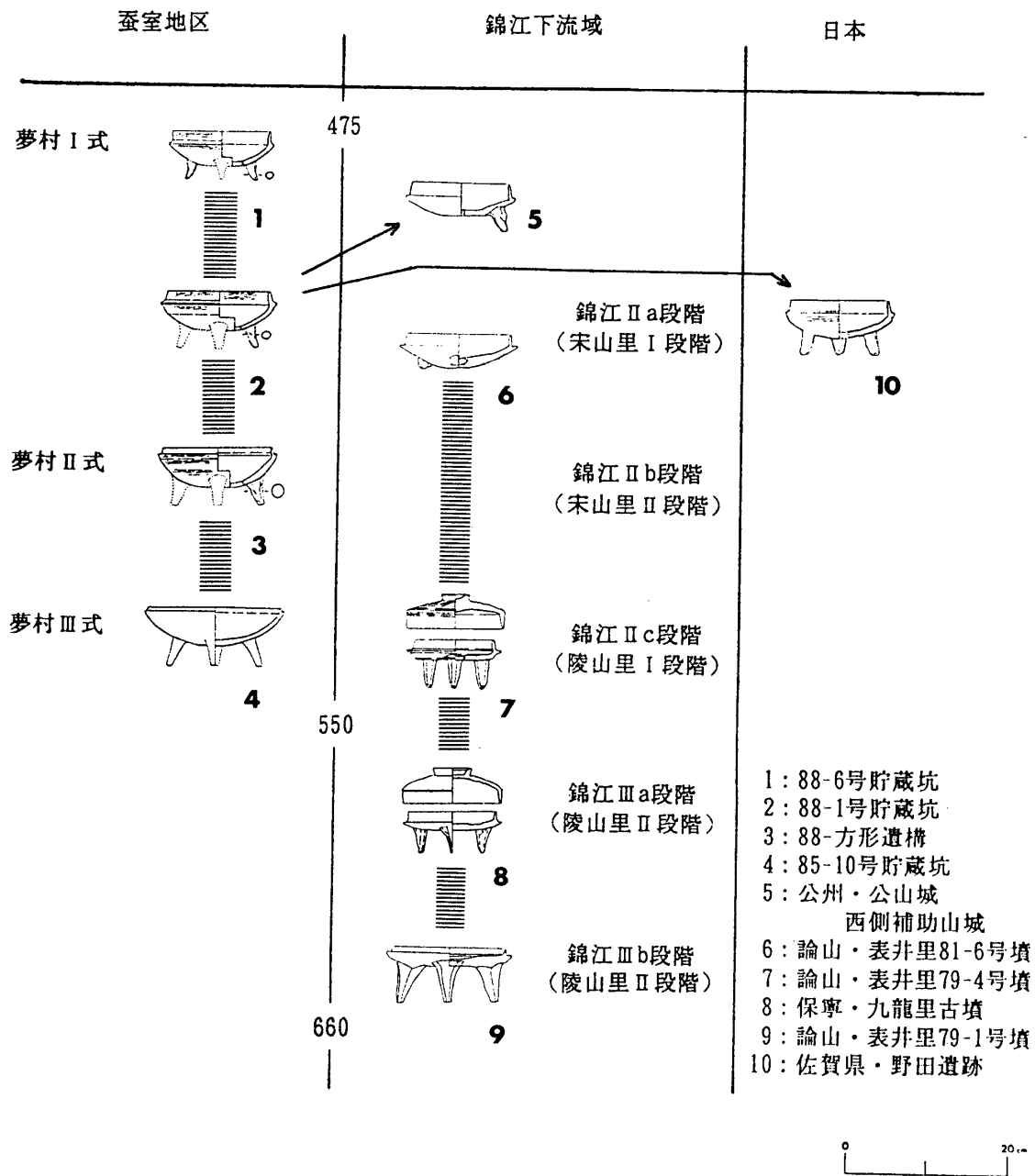
吉井秀夫は錦江下流域百濟土器を7段階、宋山里・陵山里の王陵級古墳の埋葬主体を4段階に分けている。錦江Ⅱ a段階は新興里土器群から表井里土器群への転換点であり、このとき錦江三足杯「B類」（以下、吉井による名称に「錦江」を冠す）が初めて登場する。また、穹窿天井の横穴式石室が現れる時期（宋山里Ⅰ段階）である〔1991〕。政治的画期が予想されよう。

ところで、宋山里古墳群並行期の山城と目される公州・公山城西側補助山城から蚕室地区百濟土器BⅠb類に似たものが出土している（挿図15—5）。錦江「BⅠ類」が蚕室地区BⅠb類（夢村Ⅰ式）の影響下で成立したとは考えられないだろうか。錦江下流域では、杯B類に三足を付すことによって三足杯B類が成立したと考えられているが、その契機に蚕室地区三足杯BⅠb類が関与したと考えたい。錦江「BⅡ類」以降と蚕室地区BⅡ類以降は別の歩みを示しており、錦江Ⅱ a段階が夢村Ⅰ式と一部並行しているとみてよからう。

筆者は夢村土城内出土の高杯B類と三足杯B類を比較して後者の成立を考えたが、蚕室地区の方

に多種多様の三足土器（三足盤・三足杯）があることから、蚕室地区が三足杯B類の起源地であろう。

これを器種間の関係性からみると、錦江下流域では蚕室地区の如き器種間関係（三足・台脚の接合如何で不断に器種分化が起こる）は成立しておらず、錦江三足杯「B類」は、蚕室地区とは異なる器種間関係（在来の杯B類に三足を付すことで三足杯B類が作られ、その後も型式学的平行性を保つ）に取り込まれ、異なる変化を示しているので、錦江下流域の陶工は蚕室地区のそれとは別の集団であり、錦江Ⅱa段階以前から継続していると考えられる。



挿図15 蚕室地区と他地域の三足杯

錦江下流域での三足杯B類の登場は、蚕室地区の三足杯B類のデザインだけが写し取られたということになる。この他にも蚕室地区百済土器が錦江下流域で見られることはあるが、いずれも存続しておらず、蚕室地区と錦江下流域の百済土器が夢村Ⅰ式期（蚕室中期初頭）＝錦江Ⅱa段階において、特に強い単一方向（蚕室地区→錦江下流域）の影響関係を有していたらしい。これは両地域での墓制の画期に当たっている（石村洞古墳群の大型墳の廃絶、宋山里古墳群の築造）ので、単に土器の並行関係という以上の意味を有するであろう。即ち、古墳に葬られるような土器使用者の一部だけが完成品の土器を携えて錦江下流域に移動したことを示している。

#### （４） 夢村土城をめぐる政治情勢

蚕室地区百済文化の画期のうち、蚕室前期・中期の画期（5世紀後半）は錦江下流域をも巻き込むものだった。これは、高句麗・長寿王の南征、漢城の陥落と百済・蓋鹵王殺害、百済・文周王の熊津遷都という一連の乙卯の変（475年）と対応するようだ（ただし、細かく言えば、石村洞Ⅲ式と夢村Ⅰ式の端境を475年とするよりも、夢村Ⅰ式中に475年を求める方がよいと考えている）。

また、蚕室中期・後期の画期（6世紀中頃）は、新羅の漢江下流域進出（553年）に対応している。

いずれの画期においても、百済土器工人は基本的に継続していたと考えられる。ただ、器形への規制のあり方が異なっていたようである。

なお、乙卯の変後（蚕室中期）の蚕室地区は高句麗の支配下にあったと考えられてきた。その上で、ソウル大編年では変後を高句麗土器単純期とし、定森は百済土器・高句麗土器並存期とみたが、両者の差は資料操作の違いとともに、高句麗の統治形態に対する捉え方の違いを反映している〔定森 1989〕。墓制についても高句麗治下での土着系百済墓制の存続が説かれたことがあった〔林永珍 1987〕。筆者は蚕室地区には高句麗土器単純期はなく、百済土器・高句麗土器並存期を蚕室中期にあてているので、定森や林永珍に近い立場ということになるが、蚕室中期の漢江下流域が高句麗の領域であったという通説に必ずしも拘らない。というもの、古文献に対する筆者なりの解釈があるのだが、夢村土城の考古学的検討を標榜する本稿に蛇足を付すことは避け、文献上の問題は別の機会に譲ることとし、蚕室地区百済土器工人の継続性を指摘するにとどめよう。

夢村土城は、蚕室前期に城壁が版築され、蚕室中期にも土城内に墓地が営まれるなどの変貌を経つつ存続していたが、蚕室中期末までに廃絶している。とすれば、『三国史記』の乙卯の変前後の記述にみられる地名「漢城」・城塞名「漢城」は、それぞれ蚕室地区周辺と夢村土城を指すと思われる。蓋鹵王代の築城記事、乙卯の変時の籠城記事も、夢村土城を舞台とした蓋然性は高かろう。

## 5. 結 論

本稿では、蚕室地区百済土器を分類し、器種間の型学式学的関係と器種間の共伴関係という観点から8型式を設定した。夢村土城内出土百済土器はその後半5型式に該当し、前2型式（石村洞Ⅱ

・Ⅲ式)が百濟土器単純期で、その終末頃に城壁が版築され、後3型式(夢村Ⅰ～Ⅲ式)は高句麗土器を多く伴い、百濟土器にも新たな器種が現れることを示した。これは蚕室地区の墓制の画期と対応しており、並行する錦江下流域にも土器・墓制の画期がみられることが分かった。双方向の交渉・交流というよりも、単一方向の動きとみられ、かかる両地域間の画期の同時性は、史書にいう乙卯の変に符合するようである。

このとき留意すべきは、政治変動は陶工のあり方に必ずしも変更を強いなかったということである。三国時代は巨大古墳が作られ、文献によると官制も整備される方向にあった。土器は原三国時代以来のロクロ・叩き・還元炎という高度な技術で製作され、専門工人が成立していたと考えられる。かかる時代を研究するに当たり、土器と政治史を安易に結び付けてはならない。むしろ、支配者の移動・交代にも関わらず、直接生産者は移動性が低かったのではなかろうか。

しかし、本稿の考察の範囲内では、夢村土城を文献上の特定都城に比定するだけの根拠は十分ではない。やっと考古学上の時間軸に載せただけである。出土土器のごく一部を観察しえたのみで論をなした本稿は、筆者の能力を越えて筆の走りすぎた感も強い。

今後の夢村土城研究の課題は、他遺跡との並行関係を確認・精密化する一方、個々の遺構の性格を特定し、土城自体の性格を究明することであろう。考古学の立場からは、それらの課題を達成した後具体的に都城比定論に赴いても遅くはあるまい。

(1992.7.28.脱稿, 1992.8.26.補足)

**【謝辞】** 本稿を纏めるに当たり、任孝宰・陳準鉉両先生(ソウル大学校博物館)には、1990年夏の資料調査でお世話になりました。

また、資料集めから成稿に至るまで、全榮来、李康承、申敬澈、權五榮、林永珍、李熙濬、尹煥、朴廣春、金斗喆、金貞姫、高正龍、咸舜燮、金宰賢、李相均、李다운、金榮珉、李準浩、田村晃一、武田幸男、小田富士雄、西谷正、岡内三眞、後藤直、柳沢一男、和田晴吾、武末純一、定森秀夫、早乙女雅博、大貫静夫、亀田修一、谷豊信、中山清隆、広瀬雄一、高橋克壽の諸先生・諸氏から御援助・御指導を賜りました。

第3章(3)は、吉井秀夫氏より賜った貴重な御教示、さらに藤本強、大塚達朗、藤尾慎一郎、中園聡、犬木努、重藤輝行、鮫島和大、松本直子の諸先生・諸氏からの御助言により成案を得ることができました。

1992年2月の「東北アジア古代史・考古学研究会」第3回交流会で本稿と同内容の発表をした折にも、参席された明松利平、東潮、伊藤嘉章、禹在柄、大井剛、大崎国生、大竹弘之、小田富士雄、神谷正弘、亀田修一、木村幾多郎、木村光一、小池寛、黄曉芬、河野一隆、甲元眞之、後藤直、酒井清治、定森秀夫、澤村雄一郎、島津義昭、高木正文、武内雅人、武末純一、竹谷俊夫、立花聡、田中一廣、田中俊明、千田剛道、千葉基次、鄭孝雲、土井基司、中島達也、中村潤子、中山清隆、西川宏、富加美泰彦、藤井和夫、堀田啓一、松波宏隆、松本啓子、宮川禎一、三好孝一、村上恭通、

森下大輔, 門田誠一, 山田邦和の各先生から貴重な御批判を賜りました。

さらに, 成稿の最終段階になって定森秀夫, 亀田修一, 吉井秀夫の3氏より重要な御教示を得ましたが, 本稿に十分生かすことができませんでした。

記して, 感謝致します。

### 引用・参考文献

- 夢村土城発掘調査団 1984 「整備・復元のための夢村土城発掘調査報告書」  
 夢村土城発掘調査団 1985 「夢村土城発掘調査報告」  
 金元龍・任孝宰・林永珍 1987 「夢村土城—東北地区発掘報告」ソウル特別市・ソウル大学校博物館  
 金元龍・任孝宰・朴淳發 1988 「夢村土城—東南地区発掘調査報告」ソウル大学校博物館  
 金元龍・任孝宰・朴淳發・崔鍾澤 1989 「夢村土城—西南地区発掘調査報告」ソウル大学校博物館
- \* \* \*
- 金吉植・南宮丞・李浩炯 1991 「天安花城里百濟墓」国立公州博物館  
 金秉模 1977 「芳莢洞古墳群—漢江流域の古墳との比較—」考古学4, 1-35頁  
 金秉模・沈光注 1987 「二聖山城(発掘調査中間報告書)」漢陽大学校博物館叢書5  
 金秉模・沈光注 1988 「二聖山城(二次発掘調査中間報告書)」漢陽大学校博物館叢書6  
 金元龍 1973 「原城郡法泉里石槨墓と出土遺物」考古美術120, 2-10頁  
 金元龍 1974 a 「三国初期の考古学的研究〔I〕」ソウル大学校論文集 人文・社会科学 19, 27-51頁  
 金元龍 1974 b 「中国での新出考古資料二種」考古美術121・122, 2-5頁  
 金元龍 1974 c 「百濟初期古墳についての再考」歴史学報62, 1-18頁  
 金元龍 1975 「百濟建国地としての漢江下流地域」百濟文化7・8, 31-38頁  
 金元龍 1986 「韓国考古学概説 第三版」一志社  
 金元龍・裴基同 1983 「石村洞3号墳(積石塚)発掘調査報告書」ソウル大学校博物館  
 金元龍・李熙濬 1987 「ソウル石村洞3号墳の年代」「斗溪李丙燾博士九旬紀念韓国史学論叢」17-32頁  
 金元龍・林永珍 1986 「石村洞3号墳東方古墳群整理調査報告」ソウル大学校考古人類学叢刊 12  
 金元龍・任孝宰・林永珍 1989 「石村洞1・2号墳」ソウル大学校考古人類学叢刊 14  
 金廷鶴 1981 a 「百濟と倭国」六興出版  
 金廷鶴 1981 b 「ソウル近郊の百濟遺蹟」郷土ソウル39, 5-18頁  
 朴淳發 1989 「漢江流域原三国時代の土器の様相と変遷」韓国考古学報23, 21-58頁  
 裴基同 1982 「石村洞4号墳横住居址出土百濟土器類」古文化20, 51-55頁  
 百濟文化開発研究院 1984 「百濟土器図録—百濟遺物図録 第2輯—」  
 徐聲勲・申光燮 1984 「表井里百濟廢古墳調査」「中島一進展報告V—」付録3  
 ソウル大学校博物館・同考古学科 1975 「石村洞積石塚発掘調査報告」ソウル大学校考古人類学叢刊 6  
 ソウル特別市・石村洞発掘調査団 1987 「石村洞古墳群発掘調査報告」  
 石村洞遺蹟発掘調査団 1984 「石村洞3号墳(積石塚)復元のための発掘報告書」  
 成周鐸 1983 「漢江流域百濟初期城址研究—夢村土城・二聖山城調査と文献との比較検討—」百濟研究14, 107-142頁  
 成周鐸 1985 「都城」「韓国史論 15 韓国の考古学Ⅲ」国史編纂委員会 159-220頁  
 安承周 1973 「百濟墳墓の構造」百濟文化6, 155-165頁  
 安承周 1975 「百濟古墳の研究」百濟文化7・8, 81-175頁  
 安承周 1985 「百濟土壙墓の研究」百濟文化16, 5-32頁  
 安承周 1989 「百濟堅穴式石槨墓の研究」韓国考古学報22, 55-71頁

白井克也

- 安承周・李南奭 1988 「論山表井里百済古墳発掘調査報告書—1985年度発掘調査—」百済文化開発研究院
- 尹武炳 1979 「連山地方百済土器の研究」百済研究10, 5-85頁
- 尹世英 1974 「可楽洞百済古墳第1・2号墳発掘調査略報」考古学3, 131-149頁
- 尹煥 1989 「漢江下流域における百済横穴式石室—可楽洞・芳蕘洞石室墳を中心にして—」古文化談叢  
20(中), 155-184頁
- 林永珍 1987 「石村洞—帯積石塚系と土壙墓系墓制の性格」「三佛金元龍教授停年退任紀念論叢 I 考  
古学篇」, 475-500頁
- 任孝宰 1976 「石村洞百済初期古墳の性格—第五号墳と破壊墳を中心にして—」考古美術129・130, 56-82頁
- 趙由典 1975 「芳蕘洞遺墳発掘報告」文化財9, 98-123頁
- 李隆助・車勇杰 1983 「清州新鳳洞百済古墳群発掘調査報告書—1982年度調査—」
- 崔夢龍・權五榮 1985 「考古学的資料を通してみた百済初期の領域考察—都城ならびに領域問題を中心と  
してみた漢城時代百済の成長過程—」「千寛宇先生還歴紀念韓国史学論叢」83-119頁
- 崔鍾圭・安在皓 1983 「新村里墳墓群」「中島—進展報告Ⅳ—」付録2
- 忠北大学校博物館 1990 「清州新鳳洞百済古墳群発掘調査報告書—1990年度調査—」
- 東潮 1982 「考古学的資料からみた四世紀の朝鮮」歴史公論8-4, 72-81頁
- 東潮 1988 「高句麗文物に関する編年学的一考察」檀原考古学研究所論集第10, 271-306頁
- 岡内三眞 1983 「東アジア史上における百済前期古墳の位置」「展望アジアの考古学—樋口隆康教授退官  
記念論集—」452-474頁
- 岡内三眞 1984 「羊形青磁の変遷」えとのす23, 117-135頁
- 緒方泉 1985 a 「高句麗古墳群に関する一試考(上)—中国集安県における発掘調査を中心にして—」  
古代文化37-1, 1-16頁
- 緒方泉 1985 b 「高句麗古墳群に関する一試考(下)—中国集安県における発掘調査を中心にして—」  
古代文化37-3, 1-20頁
- 小田富士雄 1977 「西日本発見の百済系土器」百済文化10, 31-46頁
- 小田富士雄 1979 a 「百済の土器」「世界陶磁全集 17 韓国古代」小学館, 185-214頁
- 小田富士雄 1979 b 「集安高句麗積石墓遺物と百済・古新羅の遺物」古文化談叢6, 197-219頁
- 小田富士雄 1983 a 「四世紀の百済土器—法泉里二号墳を中心にして—」「藤沢一夫先生古稀記念文化論叢」  
143-160頁
- 小田富士雄 1983 b 「越州窯青磁を伴出した忠南の百済土器—四世紀の百済土器・その二—」古文化談叢  
12, 195-208頁
- 蒲原宏行・多々良友博・藤井伸幸 1985 「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」古文化談叢15, 9-38頁
- 亀田修一 1987 「考古学から見た百済前期都城」朝鮮史研究会論文集24, 47-61頁
- 亀田修一 1990 「百済地域の初期横穴式石室」季刊考古学33, 44-45頁
- 酒井清治 1985 「千葉市大森第2遺跡出土の百済土器」古文化談叢15, 105-124頁
- 坂田邦洋・永留史彦 1974 「恵比須山遺跡発掘調査報告」長崎県峰村教育委員会
- 定森秀夫 1987 「韓国慶尚北道高靈地域出土陶質土器の検討」「東アジアの考古と歴史」上, 413-463頁
- 定森秀夫 1989 「韓国ソウル地域出土三国時代土器について」「生産と流通の考古学」443-466頁
- 定森秀夫 1990 「日本出土陶質土器の原郷」季刊考古学33, 50-53頁
- 武末純一 1980 「百済初期の古墳—石村洞・可楽洞古墳群を中心にして—」「鏡山猛先生古稀記念古文化論叢」  
437-464頁
- 西谷正 1980 「百済前期古墳の形成過程」百済文化13, 5-26頁
- 藤沢一夫 1955 「百済の土器陶器」「世界陶磁全集 13 朝鮮上代・高麗篇」河出書房 187-206頁
- 門田誠一 1990 「朝鮮半島における墳丘墓の形成」季刊考古学33, 24-28頁
- 吉井秀夫 1991 「朝鮮半島錦江下流域の三国時代墓制」史林 74-1, 63-101頁